

上
園
遺
跡
9

上園遺跡 9

～ 第16次調査 ～

大野城市文化財調査報告書 第193集



大野城市文化財調査報告書
第193集

大野城市教育委員会

2022

大野城市教育委員会

かみのその
上園遺跡 9

～ 第16次調査 ～

大野城市文化財調査報告書 第193集



2022

大野城市教育委員会

序

大野城市は福岡平野の南部に位置し、西暦665年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。

上園遺跡は、市域のほぼ中央に位置し、国指定史跡である牛頸須恵器窯跡の北側の一角にあたります。これまで16回にわたる発掘調査が行われ、古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡が確認されました。また、須恵器生産にかかわる遺構が多く発見されたことから、牛頸須恵器窯跡に密接にかかわる工人たちの集落として注目されています。

今回報告する調査地では、主に平安時代の遺構が見つかりました。注目されるのは2条の大溝で、集落を区画する役割を果たしていたと考えられます。今回の調査は、大野城市における平安時代の歴史を復元する上で重要な成果となりました。

本書が学術研究はもとより、地域の歴史や文化財の理解と認識を深める一助となり広く活用されることを願ってやみません。

最後になりますが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご指導を賜りました関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和4年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 伊藤 啓二

例 言

1. 本書は、大野城市上大利4丁目126番1で計画される保育園建設に伴う事前の発掘調査として実施した上園遺跡第16次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は大野城市教育委員会が主体となり、社会福祉法人大楠会理事長齊藤千加子氏の委託を受け実施した。
3. 発掘調査は山元瞭平、齋藤明日香が担当した。
4. 遺構実測及び地形測量は、山元、齋藤が行った。
5. 遺構写真は山元、齋藤が撮影した。
6. 遺物写真は(株)写測エンジニアリングに委託し、牛嶋茂が撮影した。
7. 遺物実測は山元、齋藤、小畑貴子、古賀栄子、小嶋のり子、篠田千恵子、白井典子、津田りえ、仲村美幸、氷室優、松本友里江が行った。
8. 遺物拓本は古賀、小嶋が行った。
9. 遺構図製図・遺物図製図は山元、齋藤、小嶋が行った。
10. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修）を使用した。
11. 本書図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標（第Ⅱ系）による。
12. 本書の第1図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』・『不入道』を使用した。
13. 遺物の名称のうち、須恵器蓋杯については平城京分類による呼称を用いる。
14. 本書に掲載の出土遺物・実測図・写真は、大野城市教育委員会が保管・管理している。
15. 青銅製品の蛍光X線分析に際しては、九州歴史資料館小林啓氏に多大なるご協力を頂いた。また、分析結果（第Ⅳ章）についても玉稿を賜った。
16. 本書の執筆は山元、齋藤が行い、編集は齋藤が行った。
17. V章の執筆に関しては、次の方々の協力を得た（敬称略・五十音順）。
朝岡俊也、井上義也、大隈彩未、武末純一、田尻義了、常松幹雄、中尾祐太

本文目次

| | |
|-----------------------|----|
| I. はじめに | |
| 1. 調査に至る経緯 | 1 |
| 2. 調査組織 | 1 |
| II. 位置と環境 | |
| 1. 地理的環境 | 4 |
| 2. 歴史的環境 | 4 |
| III. 調査の成果 | |
| 1. 調査の概要 | 9 |
| 2. 遺構 | 9 |
| 3. 出土遺物 | 12 |
| 4. 小結 | 18 |
| IV. 上園遺跡出土小銅鐸舌の蛍光X線分析 | 25 |
| V. 総括 | |
| 1. 遺跡の位置づけ | 27 |
| 2. 青銅製品の位置づけ | 30 |
| 3. 棒状土製品の位置づけ | 33 |

挿図目次

| | |
|------------------------------|-----|
| 第1図 調査地点位置図 (1/3,000) | 3 |
| 第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000) | 6 |
| 第3図 遺構配置図 (1/150) | 7～8 |
| 第4図 SD02土層実測図 (1/20) | 9 |
| 第5図 SD01土層実測図 (1/50) | 10 |
| 第6図 SD04・06土層実測図 (1/20、1/40) | 11 |
| 第7図 SD01出土遺物実測図① (1/3) | 12 |
| 第8図 SD01出土遺物実測図② (1/3) | 13 |
| 第9図 SD01出土遺物実測図③ (1/3) | 14 |
| 第10図 SD01出土遺物実測図④ (1/3) | 15 |
| 第11図 SD01出土遺物実測図⑤ (1/3) | 16 |
| 第12図 SD01出土遺物実測図⑥ (1/2) | 17 |
| 第13図 SD01出土遺物実測図⑦ (1/1) | 17 |
| 第14図 SD02・04・06出土遺物実測図 (1/3) | 19 |
| 第15図 SP15・遺構検出時出土遺物実測図 (1/3) | 20 |
| 第16図 上園遺跡周辺遺構分布図 (1/3,000) | 29 |

| | | |
|------|---------------------------------|----|
| 第17図 | 福岡県内出土小銅鐸の諸例 (1/3、9のみ1/4) | 32 |
| 第18図 | 福岡平野棒状土製品出土地 (1/150,000) | 34 |
| 第19図 | 棒状土製品出土地別比率 | 34 |

表 目 次

| | | |
|-----|----------------|----|
| 第1表 | 遺物観察表① | 21 |
| 第2表 | 遺物観察表② | 22 |
| 第3表 | 遺物観察表③ | 23 |
| 第4表 | 遺物観察表④ | 24 |
| 第5表 | 小銅鐸・舌集成表 | 31 |

図 版 目 次

| | | |
|------|--------------------------|--------------------------|
| 図版1 | (1) I区全景 (南西から) | (2) II区全景 (北東から) |
| 図版2 | (1) I区俯瞰写真 (上が北) | (2) II区俯瞰写真 (上が北) |
| 図版3 | (1) 調査前全景 (南西から) | (2) I区SD01完掘状況 (南から) |
| | (3) II区SD01完掘状況 (南西から) | |
| 図版4 | (1) SD01土層 A - A' (南西から) | (2) SD01土層 B - B' (南西から) |
| | (3) SD01土層 C - C' (南西から) | |
| 図版5 | (1) SD01遺物出土状況 (北から) | (2) SD01掘削状況 (北から) |
| | (3) SD02完掘状況 (南西から) | |
| 図版6 | (1) SD02土層 (東から) | (2) SD04完掘状況 (北東から) |
| | (3) SD04土層 A - A' (西から) | |
| 図版7 | (1) SD04土層 B - B' (南から) | (2) SD06完掘状況 (北西から) |
| | (3) SD06土層 (西から) | |
| 図版8 | 出土遺物1 | |
| 図版9 | 出土遺物2 | |
| 図版10 | 棒状土製品集合 | |

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

上園遺跡は、福岡県大野城市上大利3・4丁目を中心に広がる古墳時代から中世にかけての集落遺跡で、牛頸須恵器窯跡操業に関わる工人集落として注目されている遺跡である。1985年以降、15回にわたる発掘調査が実施され、今回報告するのが第16次発掘調査である。

調査地は上大利4丁目126番1で、周知の埋蔵文化財包蔵地「上園遺跡」の範囲内にあたる。埋蔵文化財の照会を受け、令和元（2019）年8月8日に確認調査を実施したところ、現地表下40～60cmの深さで遺構が確認された。

事業者は当該地に保育園を建設する予定であり、対象地全体を平均で20cm掘削し整地を行ったのち、深さ9mの基礎を伴う建物を建設する計画であった。計画通りに工事が施工されると建物部分に関しては遺構の破壊が確実で、その他の部分についても保護層の確保が困難であるため、発掘調査が必要と判断された。事業者からの計画予定図面を添えて93条に基づく届出を福岡県教育庁あてに提出し、令和2（2020）年4月28日付で発掘調査の指示が出された。また、令和元年12月16日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が提出された。

これを受け、令和2年6月10日から同年10月30日にかけて発掘調査を実施した。調査対象面積は1,356㎡である。整理作業については、令和3（2021）年度に実施した。なお、発掘調査および整理作業に関する費用は、事業者が全額負担した。多大なるご理解とご協力をいただいた社会福祉法人大楠会理事長齊藤千加子氏には記して感謝の意を申し上げたい。

2. 調査組織

令和2年度から令和3年度における発掘調査及び整理体制は以下の通りである。

令和2年度（発掘調査）

| | | | | |
|--------------|-------|------------|-------|-------|
| 教育長 | 吉富 修 | | | |
| 教育部長 | 日野 和弘 | | | |
| ふるさと文化財課長 | 石木 秀啓 | | | |
| 係長 | 林 潤也 | 佐藤 智郁（～4月） | 上田 龍児 | |
| 主査 | 徳本 洋一 | | | |
| 主任主事 | 秋穂 敏明 | | | |
| 技師 | 山元 瞭平 | 齋藤明日香 | | |
| 主事（任期待） | 鮫島 由佳 | | | |
| 会計年度任用職員（調査） | 澤田 康夫 | 木原 堯 | | |
| 会計年度任用職員（啓発） | 山村 智子 | 深町 美佳 | | |
| 会計年度任用職員（庶務） | 西村 友美 | 三好 りさ | 山上 敬子 | 井之口彩子 |

令和3年度（整理作業）

| | | | |
|--------------|-------------|------------|------------|
| 教育長 | 吉富 修（～6月） | 伊藤 啓二（6月～） | |
| 教育部長 | 日野 和弘 | | |
| ふるさと文化財課長 | 石木 秀啓 | | |
| 係長 | 林 潤也 | 上田 龍児 | |
| 主査 | 徳本 洋一 | | |
| 主任主事 | 秋穂 敏明 | | |
| 主任技師 | 山元 瞭平 | | |
| 技師 | 齋藤明日香 | | |
| 主事（任期付） | 鮫島 由佳 | | |
| 会計年度任用職員（調査） | 澤田 康夫 | 石川 健（12月～） | |
| 会計年度任用職員（啓発） | 山村 智子 | 深町 美佳 | |
| 会計年度任用職員（庶務） | 三好 りさ | 光原乃里子（～9月） | 荒牧美佐子（10月） |
| | 野上 知則（11月～） | 山上 敬子 | 井之口彩子 |

発掘調査作業員（令和2年度）

| | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 浅田 ふえ | 井口るみ子 | 井上 光江 | 大浦 旗江 | 大藺 英美 | 大津 幸男 |
| 金子 伸子 | 川崎敏次郎 | 小林 敏子 | 坂本 泰子 | 佐野 敏彦 | 佐藤 寛行 |
| 篠崎 繁美 | 瀧口 松夫 | 田代 薫 | 田中 悦子 | 田中 良一 | 田野 和代 |
| 網嶋 年朗 | 手嶋 敏則 | 仲前富美子 | 仁田 幸男 | 林田 昌俊 | 東島 真弓 |
| 日高 博 | 深野 人美 | 船越 桃子 | 宮原ゆかり | 武藤マリ子 | 森 一雄 |
| 安里由利子 | 山下 宏昭 | 吉田 秀俊 | | | |

整理作業員

| | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 小畑 貴子 | 古賀 栄子 | 小嶋のり子 | 篠田千恵子 | 白井 典子 | 津田 りえ |
| 仲村 美幸 | 氷室 優 | 松本友里江 | | | |



第1図 調査地点位置図 (1/3,000)

Ⅱ．位置と環境

1．地理的環境

大野城市は福岡平野の南部に位置し、南北に細長く中央部がくびれた形を呈する。市域の南側には、牛頸山とそれから派生する低丘陵が広がる。牛頸山は、背振山系の一角をなし、地盤は早良型花崗岩に属し、表層は風化が激しい真砂土となっている。牛頸山北麓から北側低丘陵にかけては、御笠川の支流である牛頸川と、牛頸川の支流である平野川の開析作用によって無数の谷がつけられ、複雑な地形を形成している。

上園遺跡は、市域のほぼ中央に位置し、南部の牛頸山から北側に派生する丘陵に挟まれた谷部に立地する。

2．歴史的環境

上園遺跡の所在する大野城市南部の牛頸山北麓周辺では、旧石器時代から近世にいたるまでの遺跡が確認されている。ここでは、旧石器時代～中世までの周辺遺跡を概観したい。

旧石器時代の遺跡は少ないが、当遺跡の東側に位置する出口遺跡で剥片尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡は、本堂遺跡や塚原遺跡群、日ノ浦遺跡などで確認されている。本堂遺跡では、遺構は確認されていないものの縄文時代早期の撚糸文土器や押型文土器が出土している。塚原遺跡群では、後期後半から晩期にかけての竪穴住居跡や土坑が確認された。日ノ浦遺跡では、後期末～晩期前半の竪穴住居跡や土坑が確認された。

弥生時代になると遺跡数は増加し、御笠川や牛頸川流域を中心とする平野部に多くなる。遺跡としては、御供田遺跡や本堂遺跡、日ノ浦遺跡などがあげられる。御供田遺跡では、前期後葉から前期末にかけての溝や、中期初頭から中期後半にかけての住居跡や土坑が確認されている。本堂遺跡では早期から後期にかけての竪穴住居跡や溝などが確認されている。日ノ浦遺跡では、甕棺墓や土坑墓が検出された。

古墳時代になると、6世紀以降に遺跡数が増加する。6世紀中頃には、九州最大の須恵器窯跡である牛頸窯跡群の操業が開始される。6世紀末から7世紀前半になると、窯の基数が大幅に増加し、牛頸窯跡群特有の「多孔式煙道」が登場する。また、小田浦窯跡群や月ノ浦遺跡では、瓦陶兼業窯が確認されており、生産した瓦は那津官家と想定される福岡市那珂遺跡群へ供給されている。集落としては、塚原遺跡群、日ノ浦遺跡、上園遺跡などがあげられる。塚原遺跡群では、後期の竪穴住居跡や掘立柱建物が確認された。土師器に比べて須恵器の出土量が多く、住居跡からは器形・調整は土師器の手法を用いるが、焼成は須恵器のように青灰色になる甕や甑が出土している。このことから、須恵器生産に関わっていた人々の集落と考えられている。日ノ浦遺跡では、竪穴住居跡や溝などが確認されており、溝からは大量の須恵器が出土した。上園遺跡では、後期の竪穴住居跡や掘立柱建物、ロクロピットなどが確認された。焼歪んだ須恵器や粘土塊なども出土することから、須

恵器工人集落と考えられている。古墳としては、後田古墳群、小田浦古墳群、塚原古墳群などがあげられる。後田古墳群は後期から終末期にかけて、築造・追葬が行われ、小田浦古墳群は後期に築造された。両古墳群から窯を掘るための道具である鉄製U字型鋤先が出土しており、被葬者は須恵器工人であったと推測される。塚原古墳群は中期末から後期にかけて築造され、出土遺物として、鉄刀や鉄鎌などの武器類、鎌・鋤先などの農具類、ガラス小玉や管玉、銅釧などの装身具が出土した。その他特殊な事例としては、梅頭遺跡第1次調査1号窯において、廃窯後に「墓」として転用されたものが確認されており、窯内から鉄刀や鉄鎌、耳環などの副葬品が出土している。

奈良時代の遺跡としては、本堂遺跡や塚原遺跡群、日ノ浦遺跡などがあげられる。本堂遺跡では、掘立柱建物や竪穴住居跡、溝などが確認されている。円面硯や転用硯、墨書土器などが出土しており、寺が存在していた可能性が指摘されている。塚原遺跡群では、竪穴住居跡や土坑、廃棄土坑などが確認され、廃棄土坑には須恵器が一括して廃棄されていた。また、獣脚や土馬が確認されている。日ノ浦遺跡では、竪穴住居跡や土坑、廃棄土坑が確認された。特に廃棄土坑から一括出土した須恵器は、8世紀～9世紀代の編年資料として良好なものである。また、牛頸窯跡群は全盛期を迎え、最も多くの窯が操業される。ハセムシ窯跡群や井手窯跡群では、大小の窯を使い分けており、大型の窯では大甕、小型の窯では食器類の生産が行われたようである。特徴的な遺物として、調納を示すヘラ書きが施された大甕が見つかった。

平安時代に入ると遺跡数は減少し、牛頸窯跡群も9世紀中頃に操業を停止する。当該期の遺跡は、本堂遺跡や上園遺跡、小水城周辺遺跡などで確認されている。本堂遺跡では9世紀代の遺構は確認されず、10世紀以降に遺構が増加し、掘立柱建物や竪穴住居跡、溝などが確認されている。また、谷部からは墨書土器や呪符木簡など、祭祀遺物が多く出土している。上園遺跡では、掘立柱建物や井戸、溝などが確認されている。小水城周辺遺跡では、掘立柱建物や土坑、溝などが確認されており、遺構検出面からは八稜鏡が出土している。これらの遺跡が所在する上大利地区一帯からは棒状土製品や瓦器が数多く出土しており、瓦器焼成に関わる遺跡としても注目される。

平安時代以降の中世の遺跡は、市域南部ではさらに減少する。遺跡としては、本堂遺跡や平野遺跡があげられる。本堂遺跡では当該期の遺跡が確認されているが、平安時代ほどの盛行はみられない。平野遺跡では、掘立柱建物や竪穴状遺構などが確認された。陶磁器や土師器が出土し、特に土師器の小皿が数多く出土した。



【春日市】

- | | | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-----------|-----------|----------|------------|
| 1. 須玖遺跡群 | 2. 春日公園内遺跡 | 3. 小倉水城跡 | 4. 大土居水城跡 | 5. 惣利窯跡群 | 6. 惣利遺跡 | 7. 惣利北遺跡 |
| 8. 惣利東遺跡 | 9. 惣利西遺跡 | 10. 大牟田窯跡 | 11. 向谷北遺跡 | 12. 平田北遺跡 | 13. 円入遺跡 | 14. 春日平田遺跡 |
| 15. 春日平田西遺跡 | 16. 春日平田東遺跡 | 17. 浦ノ原窯跡群 | | | | |

【大野城市】

- | | | | | | | |
|----------------|-------------|-----------|-----------|----------------------------|---------------|--------------|
| 18. 原ノ畑遺跡 | 19. 大道端遺跡 | 20. ハザコ遺跡 | 21. 後原遺跡 | 22. 御供田遺跡 (九州大学筑紫キャンパス遺跡群) | 28 (33). 谷川遺跡 | 29. 永福遺跡 |
| 23. 池田・池ノ上遺跡 | 24. 梅頭遺跡群 | 25. 本堂遺跡 | 26. 上園遺跡 | 27. 下大利廃寺 | 30. 出口遺跡 | 31. 矢倉遺跡 |
| 30. 向川路遺跡 | 31. 末次遺跡 | 32. 天神田遺跡 | 34. 唐土遺跡 | 35. 父子嶋遺跡 | 36. 谷川遺跡 | 37. 矢倉遺跡 |
| 38. 小水城周辺遺跡 | 39. 上大利小水城跡 | 40. 谷蟹遺跡群 | 41. 野添遺跡 | 42. 野添窯跡群 | 43. 花無尾遺跡 | 44. 平田1・2号窯跡 |
| 45. 横峰Ⅰ遺跡 | 46. 横峰Ⅱ遺跡 | 47. 屏風田遺跡 | 48. 日ノ浦遺跡 | 49. 塚原遺跡群 | 50. 畑ヶ坂遺跡 | 51. 下ノ原遺跡 |
| 52. 月ノ浦遺跡 | 53. 正楽寺跡 | 54. 胴ノ元古墳 | 55. 胴ノ元窯跡 | 56. 胴ノ元遺跡 | 57. 大行事遺跡 | 58. 平野遺跡 |
| 59. 城ノ山窯跡・不動城跡 | 60. 中通古墳 | 61. 中通遺跡 | 62. 中通古墳群 | 63. 中通窯跡群 | 64. 後田窯跡群 | 65. 小田浦窯跡群 |
| 66. 石坂窯跡群 | 67. 大谷窯跡群 | 68. 原浦窯跡群 | 69. 原窯跡 | 70. 井手窯跡群 | 71. ハセムシ窯跡群 | |

【太宰府市】

- | | | | | | |
|----------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 72. 島本遺跡 | 73. 神ノ前遺跡 | 74. 篠振遺跡 | 75. 宮ノ本遺跡 | 76. カヤノ遺跡 | 77. 京ノ尾遺跡 |
|----------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第3図 遺構配置図 (1/150)

Ⅲ. 調査の成果

1. 調査の概要

上園遺跡は、牛頸川の支流である平野川が形成した沖積地上に位置している。これまで15次におよぶ調査を実施し、古墳時代から中世にかけての集落跡を確認した。

調査対象地は標高30m前後の平坦な土地で、調査前は水田・畑として利用されていた。調査期間は令和2（2020）年6月10日から同年10月30日までで、調査面積は1,356㎡である。調査区内に排土を置く必要があったため、調査は2回に分けて実施し、北半部をⅠ区、南半部をⅡ区とした。

遺構面は、耕作土（50～60cm）を除去した後確認した。砂質土を基本とし、部分的に粘質土の堆積が認められる。まずⅠ区の調査に着手したが、水田に隣接しているために絶えず湧水し、溝跡の掘削にはポンプによる排水を要した。雨の多い期間とも重なり、当初の予定よりも遅い8月25日にⅠ区の調査を完了した。同日より埋め戻しおよびⅡ区の表土剥ぎを開始し、10月30日に調査を完了した。調査では、溝跡、ピット群、性格不明遺構などを確認したが、遺構密度は総じて希薄であった。なお、調査区の西側で確認された攪乱は、昭和62（1987）年に実施した上園遺跡第4次調査地にあたる。

2. 遺構

（1）溝跡

SD01（第5図、図版3～5）

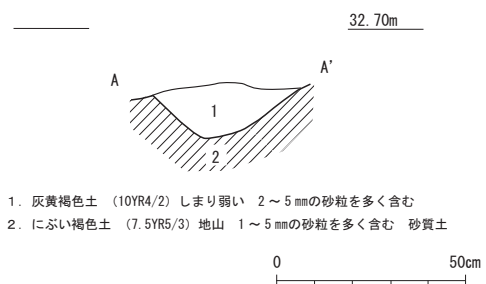
調査区の南西から北東にかけてのびる大溝である。幅5.0～6.5m、深さ0.9～1.0m、長さ28.6mを測り、調査区外へとさらに続くものと考えられる。Ⅱ区の調査において、Ⅰ区で地山と認識していた溝底面の還元した青灰色硬質層から遺物が出土したため、Ⅱ区ではさらに掘り下げを行った。結果的に、Ⅰ区SD01の底面は掘り下げが不十分となり、調査区間で土層に差異が生じた。本来は土層図A-A'のようにV字状の断面を呈していたとみられる。底面は南西に比べ北東のほうが30cm程度低いことから、水路とするならば南西から北東方向へ導水していた可能性が高い。なお、上園遺跡第4次調査でこの溝の南西部分を確認しており、一連の溝と考えられる。

埋土からは、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・白磁などが多量に出土した。遺物は、上・中・下層で取り上げたものの、明確な時期差は認められなかった。

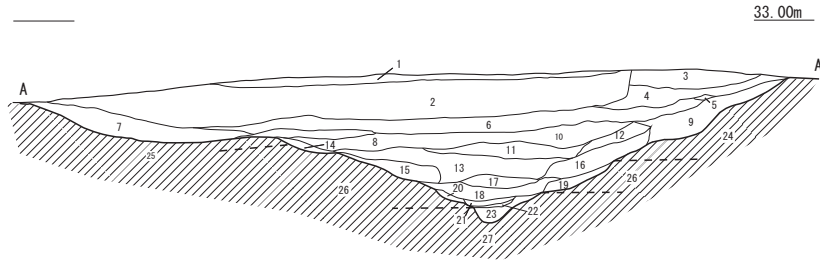
SD02（第4図、図版5・6）

調査区の北西から南東にかけてのびる小溝で、SD01に接続する。幅40cm、深さ16cm、長さ9mを測る。溝の西端部からSD01への結節点

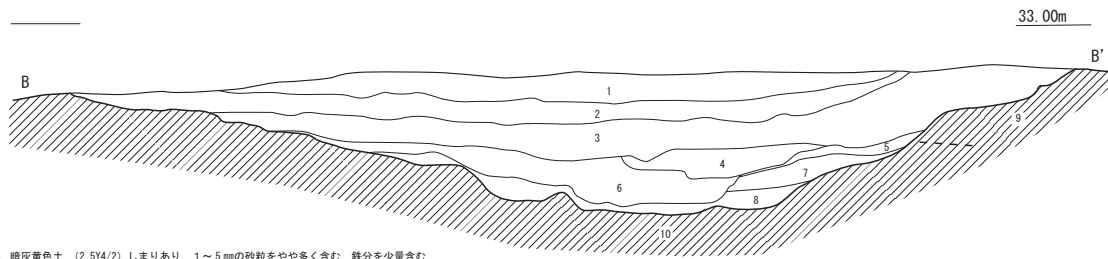
SD02



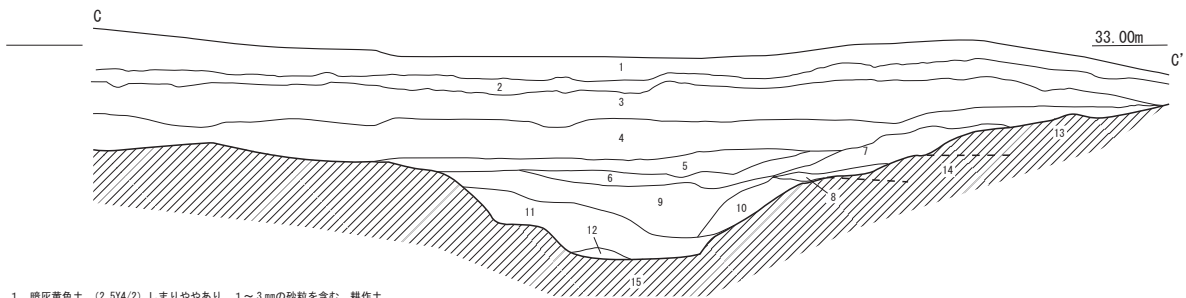
第4図 SD02土層実測図（1/20）



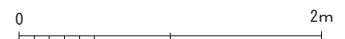
1. 褐色土 (7.5YR4/4) しまりあり 1mm前後の白色砂粒を含む 炭化物を多く含む
2. にぶい赤褐色土 (5YR4/4) しまりあり 3mm前後の白色砂粒を多く含む 鉄分ブロックを多く含む
3. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりややあり 1mm前後の白色砂粒を含む 鉄分ブロックを少量含む
4. 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) しまりややあり 鉄分ブロックを少量含む
5. 暗赤褐色砂質土 (5YR3/6) しまりなし 3mm前後の白色砂粒を多く含む
6. にぶい褐色土 (7.5YR5/3) しまりややあり 1~3mm程度の白色砂粒を多く含む 鉄分ブロックを少量含む
7. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) しまりなし 2mm程度の白色砂粒を多く含む
8. 褐色砂質土 (7.5YR4/3) しまりあり 2mm程度の赤色砂粒を多く含む 鉄分の土
9. 灰褐色土 (7.5YR6/2) しまり弱い 鉄分ブロックを含む 砂質土に近い
10. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり弱い 0.5mm程度の白色砂粒を含む 鉄分ブロックを含む
11. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) しまりなし 1~2mm前後の白色砂粒を多く含む
12. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/3) しまり強い 鉄分ブロックを含む
13. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまりややあり 1mm前後の白色砂粒を含む 鉄分ブロックを少量含む 植物質を少量含む
14. 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) しまりなし 1~2mmの白色砂粒を含む 植物質を少量含む
15. 灰褐色土 (7.5YR4/2) しまりややあり 1~3mm前後の白色砂粒を多く含む 鉄分ブロックを多く含む 植物質を少量含む
16. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりあり 1mm前後の白色砂粒をやや多く含む 植物質を少量含む
17. 褐色砂質土 (7.5YR4/6) しまりなし 1~3mmの白色砂粒を多く含む
18. 灰褐色土 (7.5YR4/2) しまりややあり 1mm前後の白色砂粒を少量含む 植物質を多く含む
19. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2) しまりなし 1~3mmの白色砂粒を多く含む
20. 黄灰色土 (2.5Y5/1) しまり弱い 1mm程度の白色砂粒を含む
21. 褐色土 (7.5YR4/6) しまり弱い 2mm程度の白色砂粒を多く含む 植物質を少量含む
22. オリーブ黒色土 (10Y3/1) しまりあり 1mm程度の鉱物を含む
23. 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりあり 1mm程度の白色砂粒を多く含む
24. 淡黄色粘質土 (5Y7/4) 地山 しまり強い 鉄分ブロックを含む
25. 暗赤褐色砂質土 (5YR3/4) 地山 しまりなし 硬い 鉄分の土
26. 明褐色砂質土 (7.5YR5/6) 地山 しまりなし 3mm前後の白色砂粒を多く含む
27. 灰色粘土 (7.5Y5/1) 地山 しまり強い 鉄分ブロックを含む



1. 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) しまりあり 1~5mmの砂粒をやや多く含む 鉄分を少量含む
2. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまり弱い 1mm程度の砂粒を多く含む 鉄分(マンガン)層
3. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりやや強い 1~2mmの砂粒を多く含む やや粘質土 鉄分(マンガン)を含む
4. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまりあり 1~3mmの砂粒を多く含む 鉄分(マンガン)を多く含む
5. 暗赤灰色土 (2.5YR3/1) しまり強い 粘質土 植物質を多く含む 腐植土層
6. 黒褐色土 (5YR3/1) しまり強い 1mm程度の砂粒を含む 鉄分(マンガン)を少量含む 粘性あり 植物質をやや多く含む 黄褐色土ブロックを含む
7. 褐色土 (7.5YR4/3) しまり弱い 1~3mmの砂粒を多く含む 鉄分(マンガン)を多く含む
8. 黒褐色土 (7.5YR3/1) しまり強い 粘質土 植物質を多く含む 腐植土層
9. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3) 地山 しまりなし 1~5mm角の砂粒
10. オリーブ灰色粘土 (2.5GY6/1) 地山 緻密な粘土層



1. 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) しまりややあり 1~3mmの砂粒を含む 耕作土
2. 黄褐色土 (2.5Y5/6) しまりややあり 1~3mm前後の砂粒を少量含む 床土
3. 灰オリーブ色土 (5Y4/2) しまり強い 1~5mmの砂粒を多く含む 鉄分ブロックを多く含む
4. 灰色土 (5Y4/1) しまり弱い 1~5mmの砂粒を多く含む 鉄分ブロックを多く含む 鉄分が雨降り状にみられる
5. 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) しまり弱い 1~3mmの砂粒を多く含む 鉄分ブロックを多く含む
6. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりややあり 1~3mmの砂粒を多く含む 鉄分を少量含む
7. 灰黄色土 (2.5Y6/2) しまり弱い(砂質土) 1~5mmの砂粒を多く含む
8. 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり強い 1~3mmの砂粒を含む 鉄分を多く含む
9. 黒褐色土 (10YR3/1) しまりあり 2mm前後の砂粒を含む 地山ブロックを9層上部に多く含む 遺物を多く含む 植物質を多く含む
10. 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまり弱い 1~3mmの砂粒を多く含む 鉄分(マンガン)を多く含む 水が湧き出る層 植物質を多く含む
11. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強い 2mm前後の砂粒を多く含む 鉄分ブロックを多く含む 遺物多く含む 植物質を多く含む
12. 黒色土 (2.5Y2/1) しまりやや強い 2mm前後の砂粒を含む
13. 褐灰色砂質土 (7.5YR6/1) 地山 しまりなし 5mm角の粗砂
14. 黄褐色粘質土 (10YR5/6) 地山 しまりあり きめ細かく粘性強い 粘土に近い
15. 黄褐色砂質土 (10YR5/6) 地山 しまりあり 5mm程度の粗砂 表面は酸化しかなり硬い



第5図 SD01土層実測図 (1/50)

までの比高差は約20cmを測り、北西から南東（SD01）方向へ水を流す機能を持っていたものと考えられる。埋土からは土師器・須恵器が出土したが、いずれも小片であった。

SD04（第6図、図版6・7）

調査区の南西から北東にかけてのびる小溝である。SD06の埋土を切る。幅80cm、深さ16cm、長さ29.6mを測り、南北で比高差は確認されなかった。土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・陶磁器などが出土したもの、多くは小片であった。

SD06（第6図、図版7）

調査区西端で確認され、北西から南東にかけてのびる溝である。幅3.6m、深さ40cm、長さ3.4mを測り、断面は逆台形をなす。確認した範囲は狭小なものであるが、比高差が約5cm確認できることから、水路とした場合は北西から南東方向に導水したものと考えられる。本堂遺跡第2・6次調査や上園遺跡第13次調査でも同様の溝が確認されており、今回確認したSD06も一連の溝と考えられる。土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・磁器・棒状土製品などが出土した。

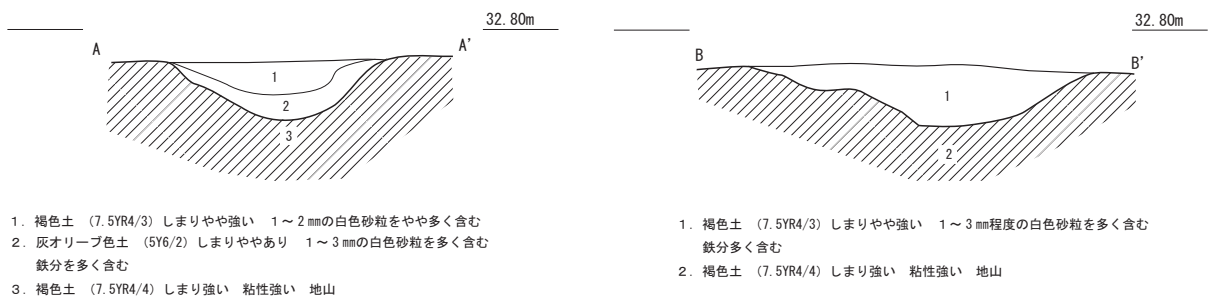
(2) ピット群

調査区南側部分において、比較的集中して検出された。いずれのピットも明確な柱穴痕などは確認できず、建物の復元はできなかった。出土した遺物は小片かつ少量であったが、平安時代後期の土師器片を含むものが多数を占めることから、多くは当該期に位置づけられるものとみられる。

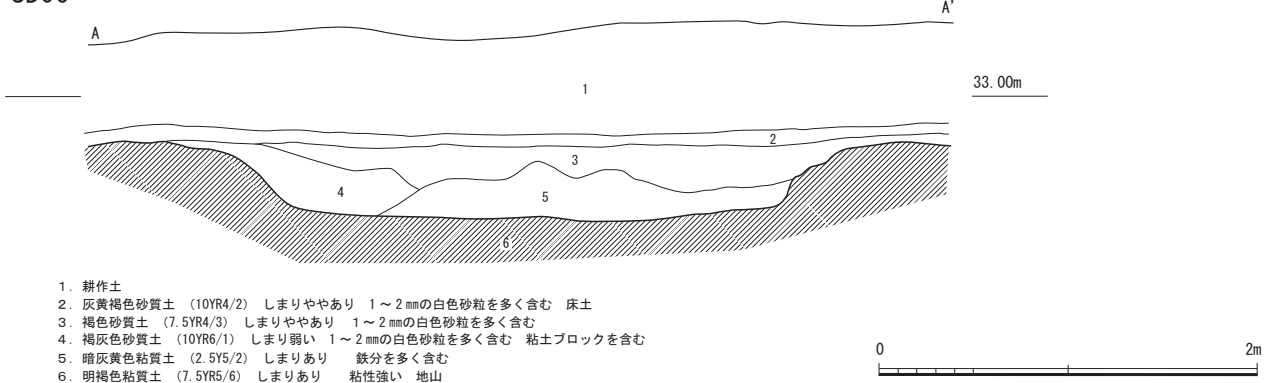
SP15

SD04の南東約1mの位置にあり、平面形態は円形で、幅20cm、深さ7cmの小穴である。パレン状石製品が出土した。

SD04



SD06

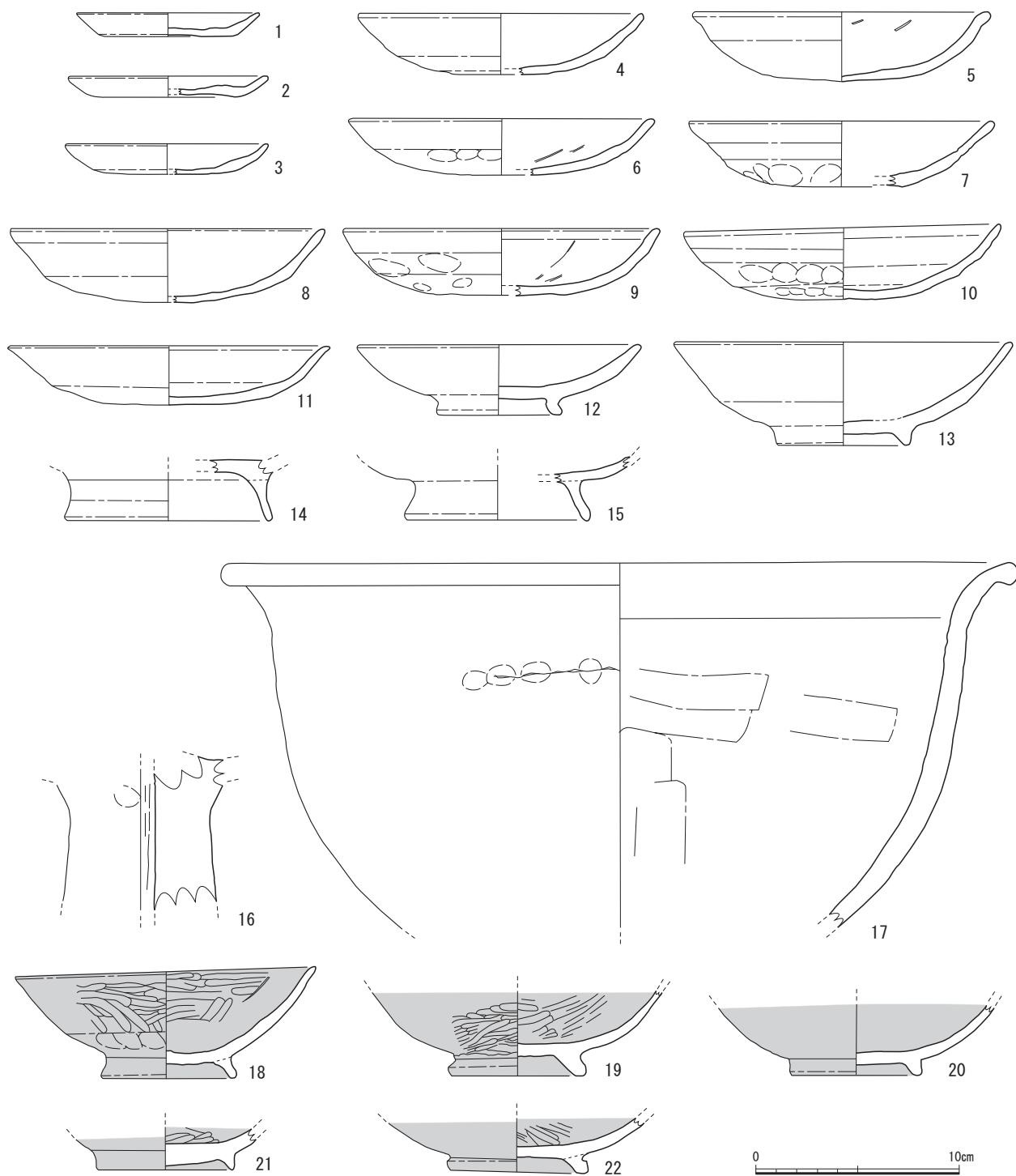


第6図 SD04・06土層実測図 (1/20、1/40)

3. 出土遺物

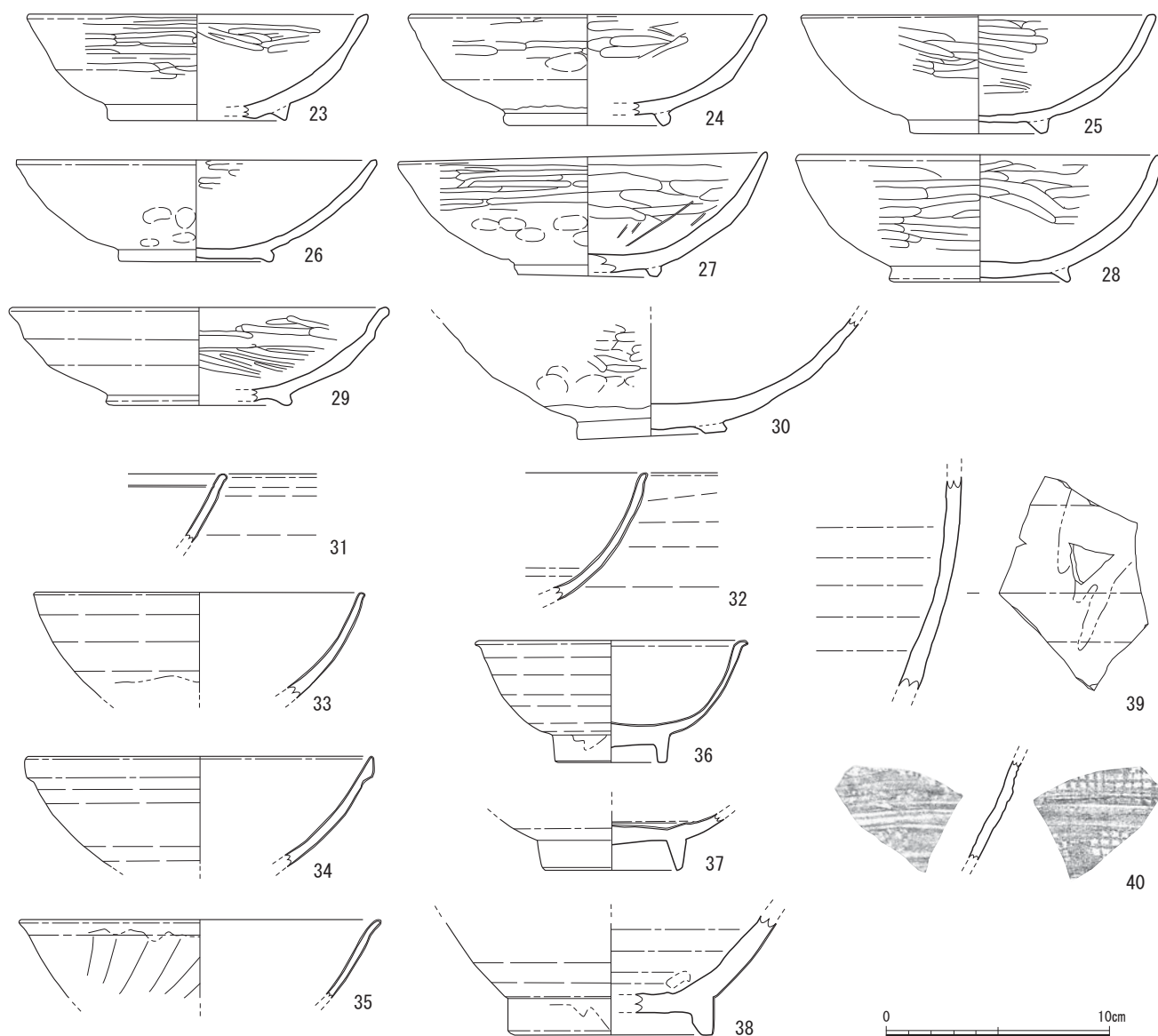
SD01

土師器（1～15） 1～3は小皿である。いずれも底部ヘラ切りで、復元口径は、9.0～10.0cmを測る。1は摩滅のため調整は不明であるが、2・3はナデにより仕上げられる。4～11は丸底杯である。平底の杯の底部を押し出して丸底とするもので、体部中位に屈曲を残す。復元口径は、14.0



第7図 SD01出土遺物実測図① (1/3)

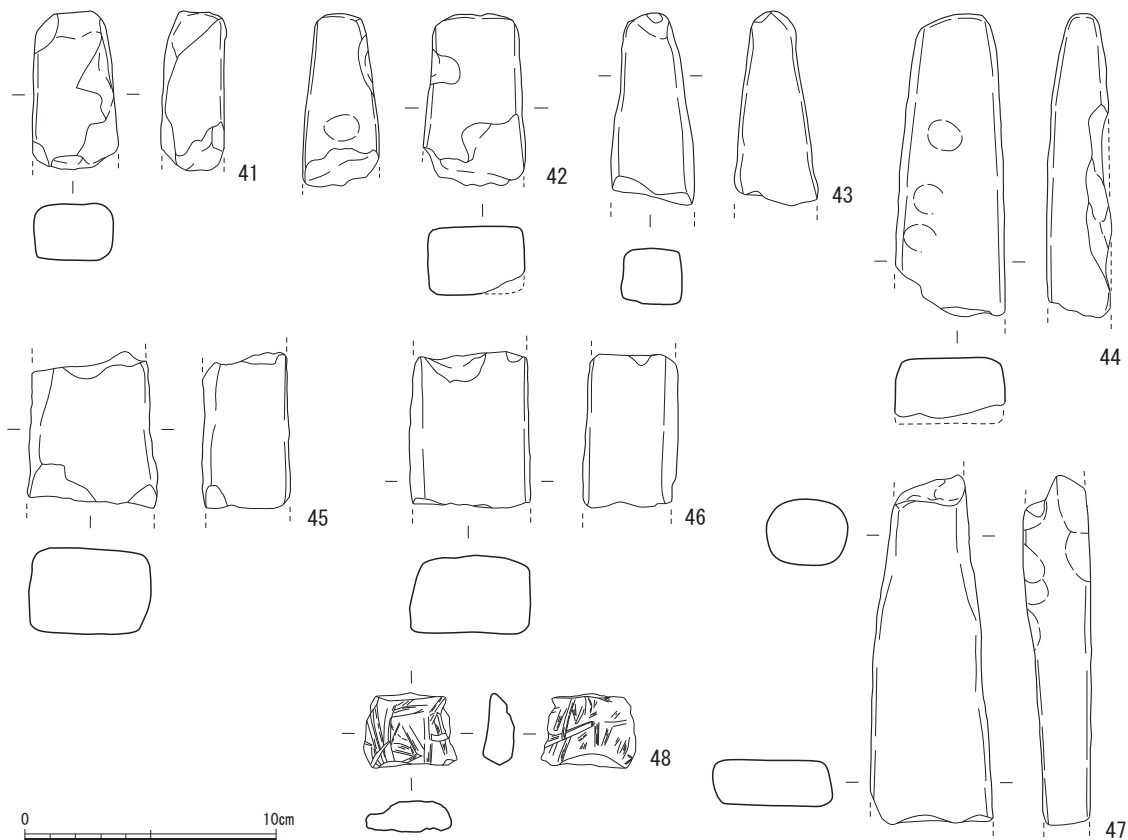
~15.8cm を測る。4 は器壁が荒れて不鮮明だが、ナデ調整で仕上げられる。5 は口縁端部が外反するもので、内面は一部黒く黒色土器のような様相を呈する。6 は外面に指頭痕、内面にコテ当て痕が残る、他はナデ。底部外面に板状圧痕が残る。7 は外面に指頭痕が残る、他はナデ。8 は摩滅のため調整は不明であるが、底部外面に板状圧痕が残る。9 は底部ヘラ切りで、板状圧痕が残る。他はナデ調整で仕上げられる。外面に指頭痕、内面にコテ当て痕が残る。10 は底部ヘラ切りで、他はナデ調整で仕上げられる。外面に指頭痕、底部外面に板状圧痕が残る。11 は底部ヘラ切り後ナデ。12~15 は椀である。12 は復元口径14.0cm を測り、浅型の椀で内面に煤が付着する。摩滅のため調整は不詳だが、高台部分は回転ナデで仕上げられる。13 は復元口径16.6cm を測り、摩滅のため調整は不詳だがナデか。14 は脚部のみ残存する。内外面ともに回転ナデ。15 は脚部と体部の一部が残存する。脚部はハの字を呈する。内外面ともに回転ナデ。16 は器台。外面はナデ、内面にシボリ痕が残る。17 は鉢で、復元口径39.0cm を測る。口縁端部を肥厚させ、体部から底部にかけてすぼまる形態をとる。外面は指頭痕が残る、内面はケズリ。



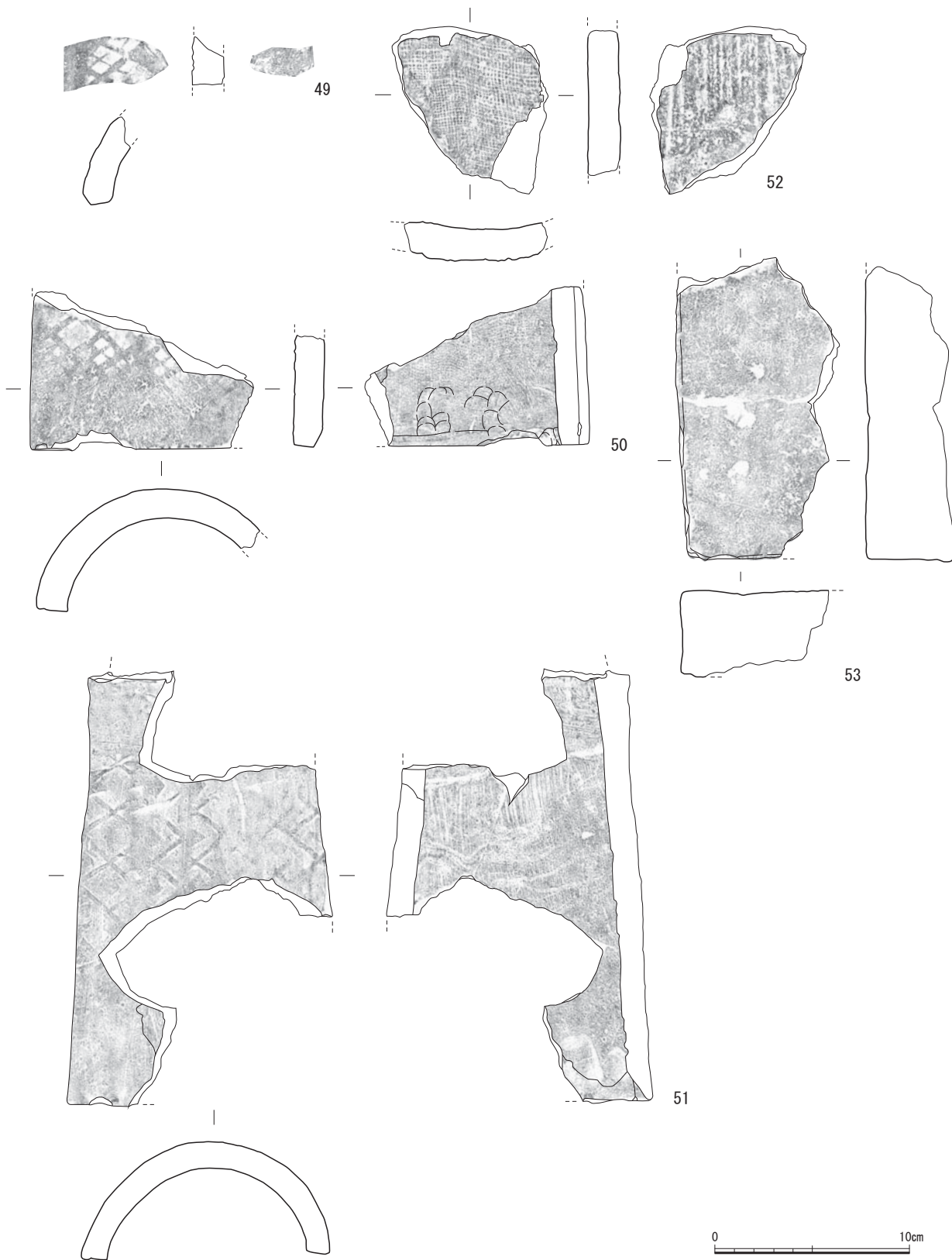
第8図 SD01出土遺物実測図② (1/3)

黒色土器 (18~22) 18~22は椀で、すべてB類。18は口径14.7cmを測る。口縁端部は丸く仕上げる。底部を押し出すが体部中位の段はなく、扁平な形状を呈する。内外面に粗い研磨を施す。19は分厚いハの字を呈する底部を持つ。内外面ともに分割して研磨している。高台部分はナデ、回転ナデで仕上げられる。内面にコテ当痕が残る。20・21は丸い高台がつく底部で、内面に横方向に研磨を施す。21の高台部分は回転ナデで仕上げられる。22は高台接合の際に、工具で外側を凹ませる。底部内面は横方向に研磨を施す。

瓦器 (23~30) 23~30は椀である。口径は、15.25~17.0cmを測る。23は底部を押し出し、体部中位がやや屈曲する。外面は横方向に、内面は摩滅のため不詳だが、口縁部から体部上位にかけて横方向に研磨を施す。断面三角形の高台がつく。24は底部を押し出し、体部中位が屈曲している。口縁部から体部中位まで、横方向に幅広の研磨を施す。外面には指頭痕が残る。25は体部中位に段はなく、内湾気味に立ち上がる口縁部は端部を丸くおさめる。内外面に横方向の研磨を施す。26は体部中位に段はなく、直線的に口縁部まで立ち上がる。内外面灰白色で、口縁部のみ黒色化している。摩滅のため調整は不詳だが、内面は口縁部に横方向の研磨を施す。外面に指頭痕、底部に板状圧痕が残る。27は底部を押し出し、体部中位がやや屈曲する。体部中央から底部にかけて器壁は分厚く、口縁部にむかうにつれて薄くなり、端部は丸くおさめる。外面は細かく、内面は幅広の研磨を横方向に施す。外面に指頭痕、内面にコテ当て痕が残る。28は体部中位に段はなく、内湾気味に立ち上がる口縁部は端部を丸くおさめる。底部はヘラ切り後回転ナデ。外面は灰白色で、口縁部のみ黒色化している。内外面に幅広の研磨を施す。29は体部中位が屈曲し、外反気味に立ち上がりな



第9図 SD01出土遺物実測図③ (1/3)



第10図 SD01出土遺物実測図④ (1/3)

がら口縁部へいたる。内面には丁寧に研磨を施す。30は体部中位から底部にかけて残存する。内外面に横方向に研磨を施す。扁平な高台がつく。

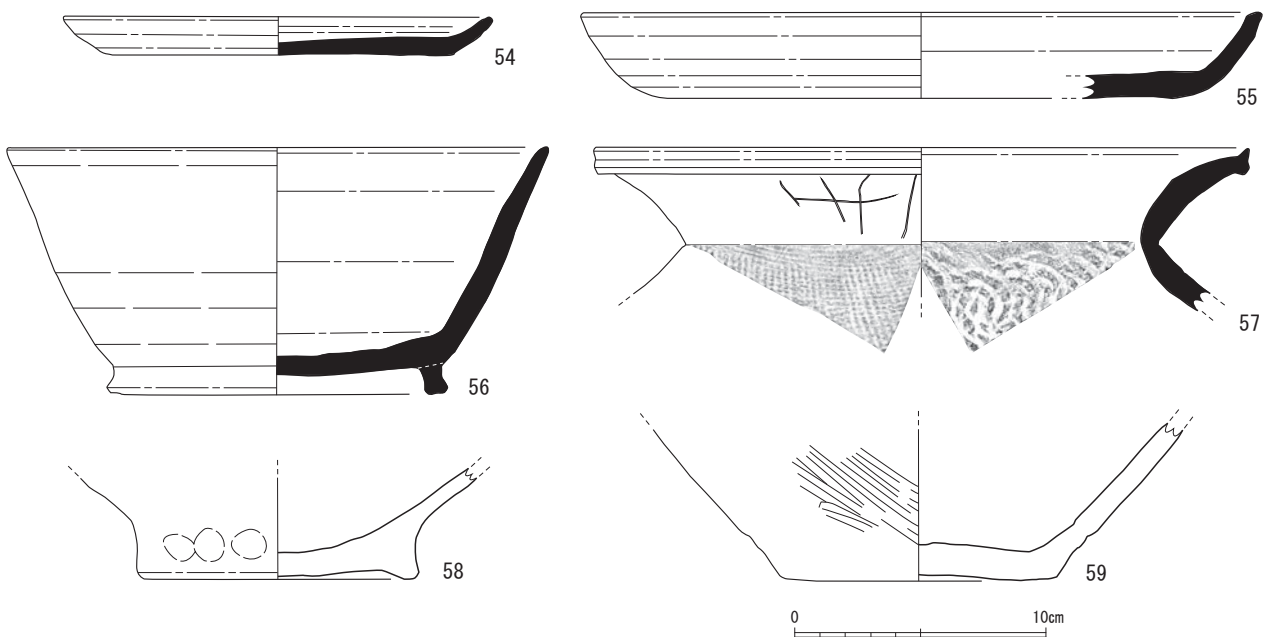
陶磁器 (31~40) 31~37は白磁。31・32は碗の口縁片で、太宰府分類V類。33~35は口縁から体部中位にかけて残存する。33は直口縁をなし、口縁端部は丸くおさめる。太宰府分類IV類。34は玉縁口縁で、太宰府分類IV類。35はやや外反する口縁部をもち、外面に縦櫛目文を施し花卉とする。太宰府分類V類。36は口縁部が外反し、細く直立した高台をもつ。太宰府分類V類。37は太宰府分類IV類。38は青磁の壺。39は中国産陶器の壺。40は高麗陶器。壺あるいは甕といった大型品の胴部片である外面には一部正格子のタタキ目が残る。内面は入念にヨコナデを施す。

土器生産関連製品 (41~48) 41~47は棒状土製品。いずれも断面が正方形もしくは長方形の棒状の製品である。45・46を除き、いずれも端部に向けて細くなる形態をとる。胎土には、白色砂粒を多く含むものと、砂粒をほとんど含まず精良なものがある。図化したものはすべて酸化焰焼成だが、出土したものの一部には還元したものもある。48はスサ入り粘土。土器焼成遺構の壁面の可能性がある。

瓦 (49~52) 49~51は丸瓦。凸面には格子目のタタキ目が残る。49は小片のため不詳だが、50・51の凹面には布目が残る。51は上園遺跡第4次調査で溝から出土したものと接合した。52は平瓦。酸化焰焼成で、内外面ともに赤色を呈する。凹面に布目が残る。

埴 (53) 無文埴。残存している面すべてに煤が付着している。

須恵器 (54~57) 54・55は皿。54は浅く、体部は直線的で口縁部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後未調整。VII B期か。55は大型で深手のものである。体部は直線的でやや外反して口縁部へいたる。底部ヘラ切り後ナデ。VI期か。56は高台のつく杯B。大型のもので、体部が直線的に外方へ開き、口縁部端部がやや外反する。高台が高く、やや外側に踏ん張る形態である。底部は回転ヘラケズリ。57は甕の口縁部。頸部でしまる形態で、外面は擬格子のタタキ、内面は同心円当て具痕が



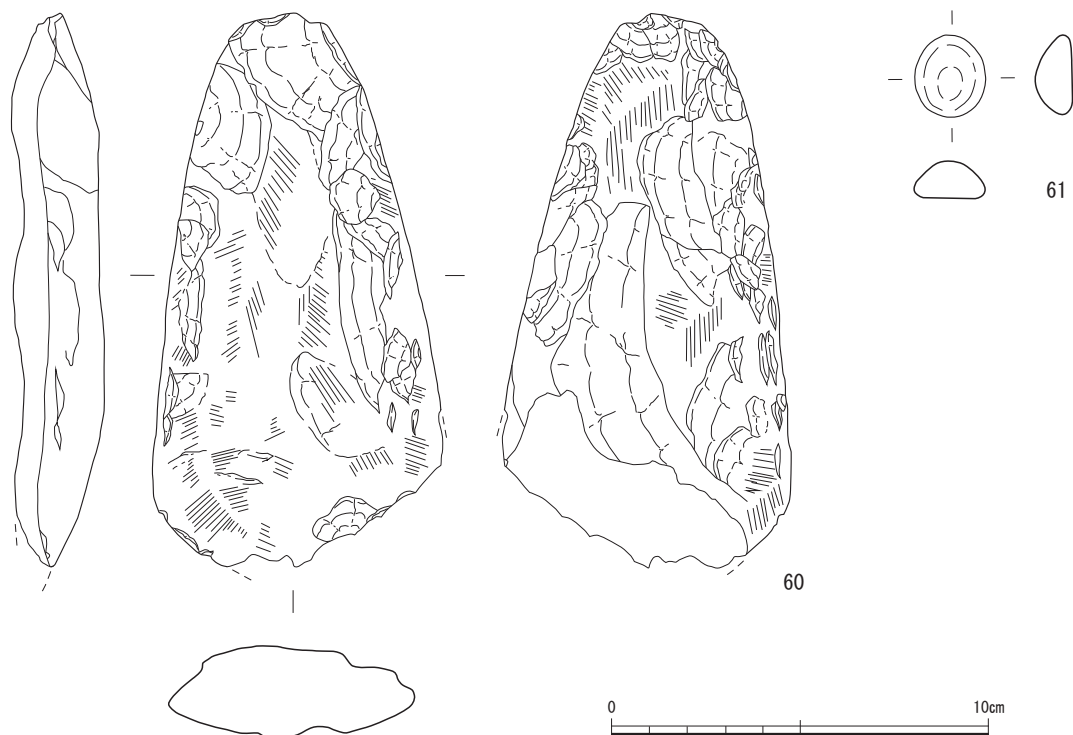
第11図 SD01出土遺物実測図⑤ (1/3)

残る。

弥生土器 (58・59) ともに甕もしくは壺の底部。58は摩滅が激しいため詳細は不明。59も摩滅が激しいため詳細は不明だが、外面にハケ目を施す。

石器 (60・61) 60は磨製石斧。安山岩製である。61は基石。青黒色を呈する。

青銅器 (62) 62は、小銅鐸舌。青銅製である。平面形態は、棒状で下端部にむかうにつれて広がり、断面形態は、楕円形を呈する。上端部には残存していないが、円環状の穿孔（環頭）がつくと考えられる。側面にバリが確認でき、2枚の鋳型を用いてつくられたものと考えられる。



第12図 SD01出土遺物実測図⑥ (1/2)

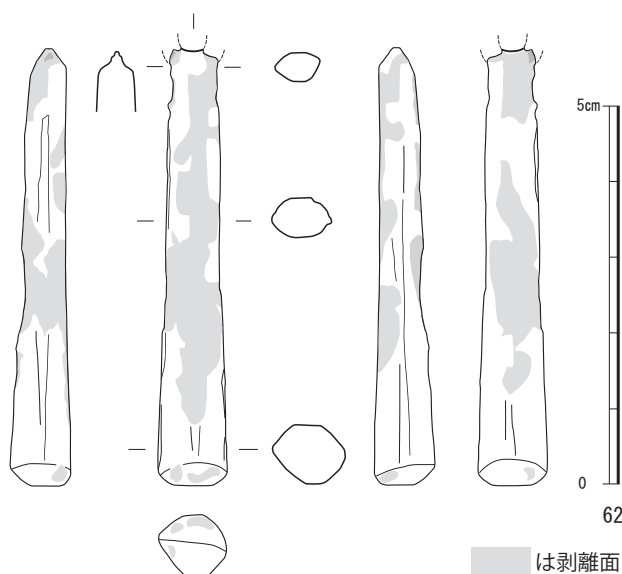
SD02

土師器 (63) 丸底杯。復元口径は、13.6cmを測る。底部から直線的に立ち上がるが、体部上半で外反し口縁へいたる。体部下半に指頭痕が残る。

須恵器 (64) 短頸壺。口縁部に段を有する。摩滅のため不詳だが、外面はカキ目か。内面には同心円当て具痕が残る。

SD04

陶磁器 (65・66) 65は陶器の播鉢。櫛目がほぼなくなり、滑らかな器面となっている。66は龍泉窯系青磁碗である。



第13図 SD01出土遺物実測図⑦ (1/1)

底部のみ残存する。内面見込みには花卉状の文様の内側に「金」の文字が確認できることから、「金玉满堂」銘をもつものとみられる。

SD06

土師器 (67～73) 67は小皿。復元口径は、9.3cmを測る。底部ヘラ切りで、他は摩滅のため不詳である。68・69は丸底杯である。平底の杯の底部を押し出して丸底とするもので、体部中位に屈曲を残す。68の復元口径は、15.0cmを測る。70～72は椀。70の復元口径は、16.2cmを測る。摩滅が激しいため詳細は不明。71は復元口径16.6cmを測る。底部ヘラ切り後ナデ。体部下半に指頭痕が残る。72は体部下位から底部にかけてのものである。摩滅のため不詳だが、高台部分は回転ナデで仕上げられる。73は器台。シボリ痕が残る。指オサエで成形したのちナデ調整。

黒色土器 (74) 74は椀でB類。内外面ともにナデ。

瓦器 (75) 75は椀。底部ヘラ切り後ナデ。

陶磁器 (76) 76は白磁椀。復元口径は、17.0cmを測る。見込みに沈線をめぐらす。高台は浅く削り込まれる。灰色を帯びた白色の釉を施すが、外面下半から底部は施釉されない。太宰府分類IV類。

須恵器 (77) 高台のつかない杯Aである。底部ヘラ切り後一部回転ナデ。赤色を呈し、焼成はやや不良である。

土器生産関連製品 (78～80) 78～80は棒状土製品。いずれも断面が正方形もしくは長方形の棒状の製品である。78は先端が先細りしないもの。80は先端が細くなる形態をとる。いずれも酸化焰焼成。

SP15

石製品 (81) 滑石製のバレン状石製品である。一部にススが付着している。

遺構検出時出土遺物

須恵器 (82・83) 82は杯B。底部外面ヘラ切り。外面の高台部に墨のような痕跡が残る。83は長頸壺である。頸部のみ残存しており、詳細は不明である。

土器生産関連製品 (84) 84は棒状土製品。断面は正方形である。酸化焰焼成。

土製品 (85・86) 85は環状土製品である。1～8mmの白色鉱物を多く含み、胎土は粗い。用途は不明だが、棒状土製品と胎土や色調が類似することから、土器焼成に関わる遺物の可能性がある。86は土馬の脚部か。手づくねにより成形される。

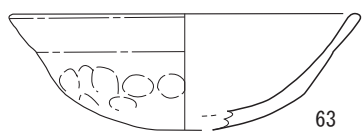
瓦 (87) 丸瓦である。凹凸面ともにナデ。

石製品 (88) 滑石製の石鍋で、縦耳のもの。外面は丁寧に面取りされており、全体にススが付着している。

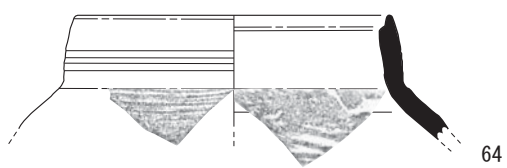
4. 小結

ここでは、出土土器の評価も踏まえ、各遺構の時期位置づけをはかる。なお、土師器杯・皿については山本信夫氏による編年（山本 1988）、土器椀については中島恒次郎氏による編年（中島 1992）、陶磁器については太宰府編年（宮崎編 2000）を用いた。

SD02

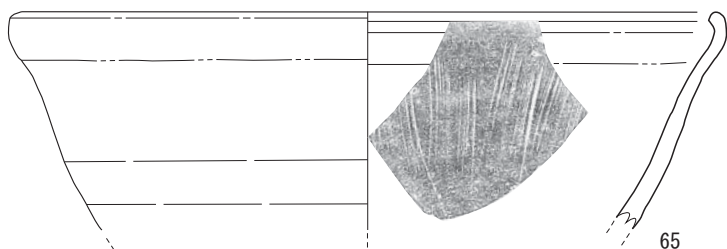


63

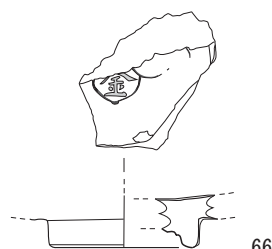


64

SD04



65

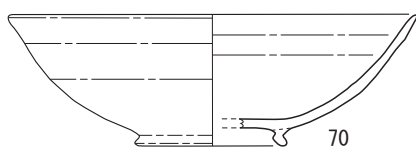


66

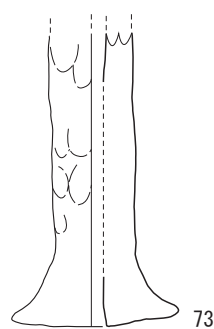
SD06



67



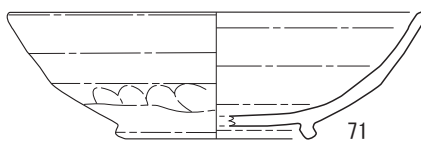
70



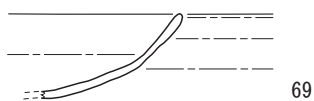
73



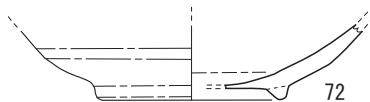
68



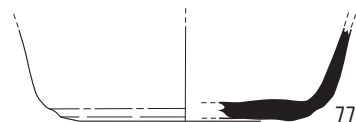
71



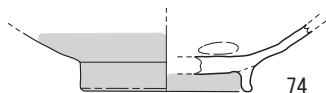
69



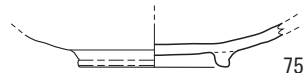
72



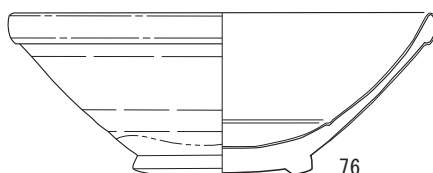
77



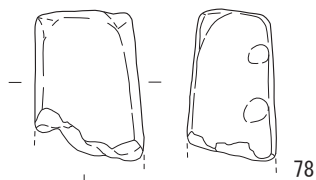
74



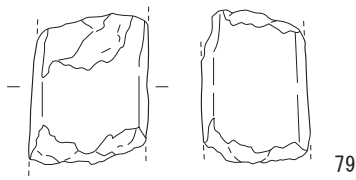
75



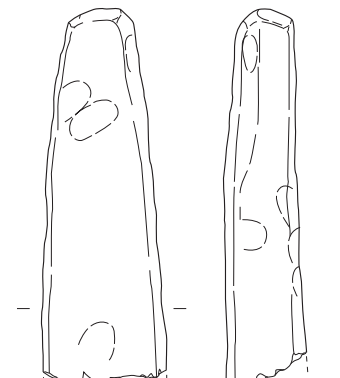
76



78



79



80

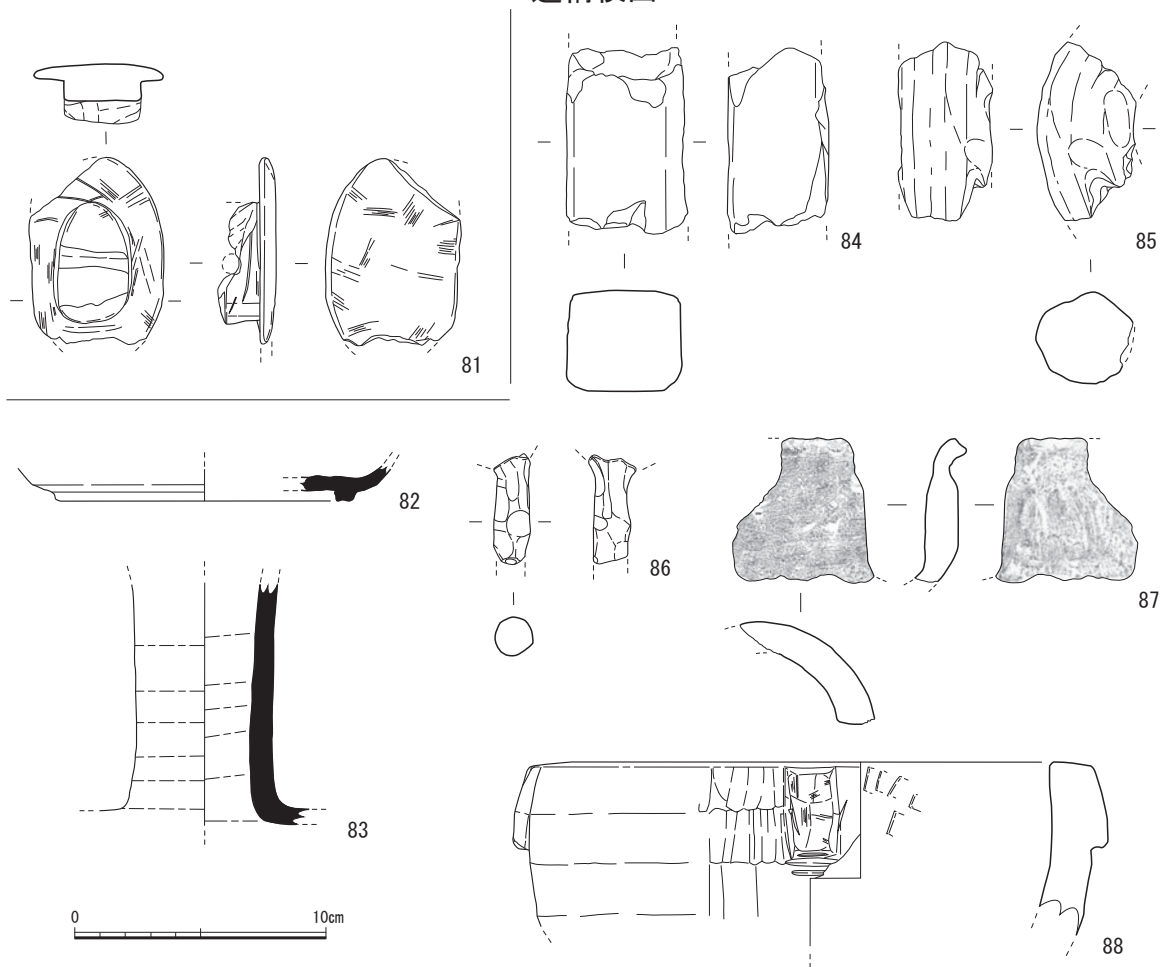


0 10cm

第14图 SD02·04·06出土遺物実測图 (1/3)

SP15

遺構検出



第15図 SP15・遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)

SD01からは土器類が多量に出土した。土師器皿・杯類はすべて底部ヘラ切り。口径や形態から、山本編年Ⅻ期に相当する。土器碗については、土師器碗が中島分類Ⅲ・Ⅳ類、黒色土器B類碗がⅣ4類、瓦器碗がⅡ1・Ⅱ2類に相当する。磁器碗はすべて白磁で、青磁を含まないことから、大宰府C期にあたる。これらを総合すると、SD01出土土器群は、11世紀後半から12世紀前半に位置づけられる。SD06も概ね同様の遺物相を呈しており、SD01と同時期に比定できる。SD02は遺物が少ないものの、丸底杯は概ね山本編年Ⅺ～Ⅻ期頃にあたる。SD01に接続することからも、SD01と同時期の所産とみてよい。SD04からは、「金玉満堂」銘をもつ青磁碗が出土している。大宰府D期にあたり、12世紀後半頃に位置づけられる。SD06の埋土を切ることからも先後関係に矛盾はない。ピット群の出土遺物は、いずれも小片で詳細な時期は決めがたいが、概ね平安時代後期と考える。

参考文献

- 中島恒次郎 1992「大宰府における碗形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会
 宮崎亮一他編 2000『大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会
 山本信夫 1988「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会

第1表 遺物観察表①

| 番号 | 種類 | 器種 | 出土地点 | 法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値) | 形態・技法・文様の特徴 | A:胎土 B:焼成 C:色調 | 備考 |
|----|------|-----|----------|---|---|--|------------|
| 1 | 土師器 | 小皿 | SD01 上層 | ① (9.0) ②1.15 ③ (6.8) | 底部外面へラ切り 他は調整不明 | A:1mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:10YR8/1灰白色 | |
| 2 | 土師器 | 小皿 | SD01 上層 | ① (9.8) ②1.05 | 底部外面へラ切りか 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ | A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:10YR8/2灰白色 | |
| 3 | 土師器 | 小皿 | SD01 下層 | ① (10.0) ②1.5 ③ (7.2) | 底部外面へラ切り 口縁部内外面回転ナデ 底部内面ナデ 他は調整不明 | A:微細～1mm程の白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:10YR8/2灰白色 | |
| 4 | 土師器 | 丸底杯 | SD01 上層 | ① (14.0) ②3.0 | 内外面ナデ | A:微細～2mm程の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:10YR8/2灰白色 | |
| 5 | 土師器 | 丸底杯 | SD01 最下層 | ① (14.6) ②3.4 | 口縁部内外面回転ナデ 底部内面不定方向ナデ 内面コテ当て痕あり 底部外面板状圧痕あり | A:微細～1mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR8/2灰白色・10YR5/2 灰黄褐色 外10YR8/2灰白色・5YR7/4に ぶい・橙色 | |
| 6 | 土師器 | 丸底杯 | SD01 最下層 | ① (15.0) ②2.75 | 内外面ナデ 体部外面一部指頭痕あり 内面コテ当て痕あり | A:微細～4mm程の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:10YR8/2灰白色～ 7.5YR8/4浅黄褐色 | |
| 7 | 土師器 | 丸底杯 | SD01 下層 | ① (15.0) ②3.2 | 口縁部外面回転ナデ 底部外面指頭痕あり 底部内面不定方向ナデ 他はナデ | A:微細な白色砂粒・黒色砂粒・雲母 を含む B:良好 C:内10YR8/3淡黄 橙色 外10YR8/3淡黄褐色～10YR6/8 明黄褐色 | |
| 8 | 土師器 | 丸底杯 | SD01 上層 | ① (15.4) ②3.6 | 底部外面へラ切り 口縁部外面回転ナデ 他は調整不明 底部外面板状圧痕あり | A:微細～2mm程の砂粒を含む B: 良好 C:内10YR8/2灰白色 外10YR8/1 灰白色 | |
| 9 | 土師器 | 丸底杯 | SD01 中層 | ① (15.6) ②3.3 | 底部外面へラ切り後ナデ 内面不定方向ナデ・コテ当て 痕あり 口縁部内外面回転ナデ 底部外面板状圧痕あり 体部外面下位指頭圧痕あり | A:微細～2mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR8/3浅黄褐色 外 10YR8/2灰白色 | |
| 10 | 土師器 | 丸底杯 | SD01 最下層 | ①15.6 ②3.7 | 底部外面へラ切り 体部外面下指頭痕あり 底部外面板状圧痕あり 他は回転ナデ | A:微細な砂粒を少量含む B:良好 C:7.5YR8/2灰白色～7.5YR8/4浅黄 褐色 | |
| 11 | 土師器 | 丸底杯 | SD01 中層 | ① (15.8) ②2.9 | 底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 他は回転ナデ | A:微細～2mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:内7.5YR8/3浅黄褐色 外 10YR8/3浅黄褐色 | |
| 12 | 土師器 | 椀 | SD01 上層 | ① (14.0) ②3.45 ④ (6.1) | 高台部回転ナデ 他は調整不明 | A:微細～4mm程の砂粒・雲母を含む B:良好 C:内10YR8/2灰白色 外 10YR8/3灰白色 | 煤付着 |
| 13 | 土師器 | 椀 | SD01 中層 | ① (16.6) ②5.1 ④ (6.0) | 内外面ナデか | A:微細な白色砂粒・1～2mm程の長 石を含む B:やや不良 C:10YR8/2 灰白色 | |
| 14 | 土師器 | 椀 | SD01 下層 | ② (3.0) ④ (10.2) | 内外面回転ナデ | A:微細な砂粒を含む B:良好 C: 10YR8/2灰白色 | |
| 15 | 土師器 | 椀 | SD01 下層 | ② (2.65) ④ (9.1) | 内外面回転ナデ | A:微細な白色砂粒・黒色砂粒・雲母 を含む B:良好 C:内5YR8/4淡 褐色 外5YR8/4淡褐色～5YR7/4にぶい ・橙色 | |
| 16 | 土師器 | 器台 | SD01 中層 | ② (7.1) | 外面ナデ・一部指頭痕あり 内面シボリ痕あり | A:微細～4mm程の白色砂粒・長石を 含む B:やや不良 C:10YR8/3灰白 色 | |
| 17 | 土師器 | 鉢 | SD01 上層 | ① (39.0) ② (18.0) | 内面削り 外面ナデ一部指頭圧痕あり | A:1～6mm程の長石を多量に含む B:良好 C:内10YR8/2灰白色・10YR4/2 灰黄褐色 外10YR6/2灰黄褐色・10YR7/3 にぶい黄褐色 | |
| 18 | 黒色土器 | 椀 | SD01 上層 | ①14.7 ②5.45 ④ (6.7) | 底部内外面ナデ 体部内外面ミガキ 体部外面下位指頭痕あり 内面コテ当て痕あり | A:微細～1mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR5/1褐灰色 外 10YR2/1黒色 | 黒色土器 B類 |
| 19 | 黒色土器 | 椀 | SD01 最下層 | ② (4.2) ④6.6 | 底部外面ナデ・回転ナデ 他はミガキ | A:微細～1.5mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR1.7/1黒色 外 10YR7/2にぶい黄褐色・10YR1.7/1黒色 | 黒色土器 B類 |
| 20 | 黒色土器 | 椀 | SD01 最下層 | ② (3.4) ④ (6.5) | 底部外面ナデ・回転ナデ 底部内面ミガキ | A:微細～1mm程の白色砂粒を含む B:やや良好 C:7.5YR2/1黒色 | 黒色土器 B類 |
| 21 | 黒色土器 | 椀 | SD01 中層 | ② (2.0) ④ (6.6) | 底部回転ナデ 他はミガキ | A:微細～1mm程の砂粒を含む B: 良好 C:10YR2/1黒色 | 黒色土器 B類 |
| 22 | 黒色土器 | 椀 | SD01 下層 | ② (2.7) ④6.6 | 外面調整不明 内面ミガキ 高台部内面ナデ | A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:10YR2/2黒褐色 | 黒色土器 B類 |
| 23 | 瓦器 | 椀 | SD01 中層 | ① (15.25) ②4.75 ④ (8.0) | 底部外面回転ナデ 口縁部内面～体部外面ミガキ | A:微細な白色砂粒を含む B:やや 不良 C:内N6/灰色～N4/灰色 外 N4/灰色～7.5YR3/4暗褐色 | |
| 24 | 瓦器 | 椀 | SD01 下層 | ① (16.0) ②4.9 ④ (7.4) | 底部外面・口縁部端部回転ナ デ 内面ミガキ 外面ミガキ一部指頭痕あり | A:1～7mm程の長石を含む B:良 好 C:7.5YR1.7/2黒色 | |

第2表 遺物観察表②

| 番号 | 種類 | 器種 | 出土地点 | 法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)〈残存値〉 | 形態・技法・文様の特徴 | A:胎土 B:焼成 C:色調 | 備考 |
|----|-----|---------------|----------|---|--|--|------|
| 25 | 瓦器 | 椀 | SD01 下層 | ① (16.0) ②5.3 ④ (6.1) | 底部外面回転ナデ 底部内面ナデ 他はミガキ | A:1~7mm程の長石を含む B:良好 C:7.5YR1.7/1黒色 | |
| 26 | 瓦器 | 椀 | SD01 中層 | ① (16.15) ②4.53 ④7.0 | 外面指頭痕あり 口縁部外面回転ナデ 口縁部内面ミガキ 底部外面板状圧痕あり | A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内N7/灰白色~N4/灰色 外N7/灰白色~10YR3/4暗褐色 | |
| 27 | 瓦器 | 椀 | SD01 中層 | ①16.5 ②5.3 ④ (6.6) | 底部内面ナデ・コテ当て痕あり 内外面ミガキ 外面指頭痕あり | A:微細~1mm程の白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内N4/灰色 外N7/灰白色~N4/灰色 | |
| 28 | 瓦器 | 椀 | SD01 中層 | ① (16.5) ② (5.65) ④ (8.1) | 底部外面ヘラ切り後回転ナデ 他はミガキ | A:微細な白色砂粒を少し含む B:やや良好 C:N7/灰白色~N4/灰色 | |
| 29 | 瓦器 | 椀 | SD01 上層 | ① (17.0) ②4.35 ④ (8.3) | 内面ミガキ 他はナデ | A:微細な白色砂粒を含む B:やや良好 C:内N3/暗灰色 外N7/灰白色~N3/暗灰色 | |
| 30 | 瓦器 | 椀 | SD01 中層 | ② (5.15) ④6.2 | 底部外面回転ナデ 底部内面ナデ一部指頭痕あり 体部内外面ミガキ | A:1~2mm程の長石を含む B:良好 C:N4/灰色 | |
| 31 | 白磁 | 椀 | SD01 中層 | ② (3.1) | 内外面施釉 外面ヘラ削り | A:精良 B:良好 C:釉5Y7/1灰白色 胎土5Y7/1灰白色 | |
| 32 | 白磁 | 椀 | SD01 最下層 | ② (5.7) | 内外面施釉 外面ヘラ削り | A:精良 B:良好 C:釉5Y7/1灰白色 胎土5Y8/1灰白色 | |
| 33 | 白磁 | 椀 | SD01 下層 | ① (14.8) ② (4.7) | 内面~体部外面中位施釉 外面回転ヘラ削り | A:精良 B:良好 C:釉7.5YR8/2灰白色 胎土5YR8/1灰白色 | |
| 34 | 白磁 | 椀 | SD01 中層 | ① (15.6) ② (4.8) | 内外面施釉 外面回転ヘラ削り | A:精良 B:良好 C:釉5YR8/2灰白色 胎土7.5YR8/2灰白色 | |
| 35 | 白磁 | 椀 | SD01 下層 | ① (16.0) ② (3.5) | 内外面施釉 外面鑿目文 | A:精良 B:良好 C:釉N8/灰白色 胎土N8/灰白色 | |
| 36 | 白磁 | 椀 | SD01 中層 | ① (12.2) ②5.45 ④5.0 | 内外面施釉 外面ヘラ削り | A:精良 B:良好 C:釉7.5Y7/1灰白色~7.5Y7/3浅黄色 胎土7.5Y8/1灰白色 | |
| 37 | 白磁 | 椀 | SD01 最下層 | ② (2.5) ④ (6.3) | 内面~体部外面上位施釉 | A:微細な黒色砂粒を少量含む B:良好 C:釉5Y7/1灰白色 胎土5Y8/1灰白色 | |
| 38 | 青磁 | 壺 | SD01 最下層 | ② (5.0) ④ (9.2) | 外面施釉 内面回転ナデ 削り出し高台 | A:精良 B:良好 C:釉 内10YR6/2灰黄褐色 外5Y7/1灰色 胎土7.5YR6/1褐色 灰色 | |
| 39 | 陶器 | 瓶 | SD01 上層 | ② (9.55) | 内外面施釉 外面回転ヘラ削り 内面回転ナデ | A:精良 B:良好 C:釉2.5Y5/3黄褐色 胎土5YR7/3にぶい橙色~2.5Y灰白色 | |
| 40 | 陶器 | 不明 | SD01 中層 | ② (4.4) | 内面木板ヨコナデ 外面正格子タタキ・ヨコナデ | A:細かい白色・褐色砂粒を含む B:良好 C:内N4/灰色 外N5/灰色 | 高麗陶器 |
| 41 | 土製品 | 棒状土製品 | SD01 上層 | 残存長6.25 最大幅3.4 最大厚2.25 | 全面ナデか | A:1~4mm程の長石類を含む B:良好 C:10YR8/3浅黄褐色 | |
| 42 | 土製品 | 棒状土製品 | SD01 下層 | 残存長6.8 最大幅4.05 最大厚3.0 | 全面ナデ 側面指頭痕あり | A:微細~2mm程の白色砂粒・5mm程の石英を少量含む B:良好 C:7.5YR7/4にぶい橙色 | |
| 43 | 土製品 | 棒状土製品 | SD01 中層 | 残存長7.65 最大幅3.3 最大厚2.4 | 全面ナデ | A:微細~2mm程の砂粒を含む B:良好 C:10YR7/4にぶい黄褐色 | |
| 44 | 土製品 | 棒状土製品 | SD01 下層 | 残存長12.0 最大幅4.35 最大厚2.5 | 全面ナデ一部指頭痕あり | A:1~1.5mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:10YR8/2灰白色 | |
| 45 | 土製品 | 棒状土製品 褐色砂土 | SD01 上層 | 残存長6.5 最大幅4.8 最大厚3.4 | 全面ナデ | A:微細~2mm程の砂粒を含む B:良好 C:10YR8/2灰白色~10YR7/3にぶい橙色 | |
| 46 | 土製品 | 棒状土製品 | SD01 上層 | 残存長6.2 最大幅4.8 最大厚3.1 | 全面ナデ | A:微細~2mm程の砂粒を含む B:良好 C:10YR7/4にぶい黄褐色 | |
| 47 | 土製品 | 棒状土製品 | SD01 下層 | 残存長13.8 最大幅4.8 最大厚2.7 | 全面ナデ一部指頭痕あり | A:1~4mm程の長石類を多く含む B:良好 C:2.5YR6/2灰黄色 | |
| 48 | 土製品 | スサ入り 粘土塊 | SD01 下層 | 最大長2.8 最大幅3.4 | スサが入る | A:2mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:2.5YR8/1灰白色 | |
| 49 | 瓦 | 丸瓦 | SD01 上層 | 厚さ2.1 | 凸面4個1単位の菱型の叩打痕 凹面調整不明 | A:微細~2mm程の白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:N7/灰色~N6/灰色 | |
| 50 | 瓦 | 丸瓦 | SD01 最下層 | 残存長10.8 厚さ2.0 | 凸面格子目文 凹面布目痕一部指頭圧痕あり | A:微細~5mm程の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:10YR7/1灰白色 | |
| 51 | 瓦 | 丸瓦 | SD01 下層 | 残存長23.7 残存幅11.05 厚さ1.8 | 凸面斜格子目文 凹面布目痕 | A:微細~6mm程の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:10BG7/1明青灰色~N5/灰色 | |
| 52 | 瓦 | 平瓦 | SD01 上層 | 残存長9.9 残存幅9.8 | 凹面布目痕 | A:微細~5mm程の白色砂粒・長石を含む B:やや不良 C:2.5YR6/8褐色 | |
| 53 | 埴 | 無文埴 | SD01 最下層 | 残存長19.0 最大幅11.2 最大厚5.9 | 調整不明 | A:微細~3mm程の長石類を含む B:良好 C:5YR2/1黒褐色~7.5YR7/1明褐色 | 煤付着 |
| 54 | 須恵器 | 皿 | SD01 中層 | ① (17.0) ②1.51 ③ (13.6) | 底部外面ヘラ切り 他は回転ナデ | A:微細~3mm程の長石・微細な黒色砂粒を含む B:良好 C:内N7/灰白色 外N8/~N7/灰白色 | |

第3表 遺物観察表③

| 番号 | 種類 | 器種 | 出土地点 | 法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値) | 形態・技法・文様の特徴 | A:胎土 B:焼成 C:色調 | 備考 |
|----|------|------------|--------------|--|--|---|------------|
| 55 | 須恵器 | 皿 | SD01 最下層 | ① (27.0) ②3.4 ③ (20.0) | 底部外面へラ切り後ナデ 他は回転ナデ | A:微細～2mm程の白色砂粒・微細な 黒色砂粒を少量含む B:良好 C: 内2.5Y5/1黄灰色 外N5/灰色 | |
| 56 | 須恵器 | 杯 | SD01 下層 | ① (21.45) ②9.8 ④ (13.5) | 体部外面～底部回転へラ削り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ | A:微細な白色砂粒・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N8/灰白色～N7/灰 白色 外N6/灰色～N5/灰色 | |
| 57 | 須恵器 | 甕 | SD01 下層 | ① (26.0) ② (5.8) | 肩部外面擬格子タタキ・カキ 目 肩部内面同心円文当て具痕あり 他は回転ナデ、口頸部へラ記 号あり | A:微細な白色砂粒・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N7/灰白色 外N7/ 灰白色～N5/灰色 | |
| 58 | 弥生土器 | 甕もしくは 壺 | SD01 最下層 | ② (4.3) ③ (11.2) | 内外面調整不明 体部外面下位指頭痕あり | A:白色砂粒・石英・長石を多く含む B:やや良好 C:内10YR7/2にぶい黄 橙色～10YR4/1褐灰色 外10YR8/2灰 白色～7.5YR5/6明褐色・10YR2/1黒色 | |
| 59 | 弥生土器 | 甕もしくは 壺 | SD01 最下層 | ② (6.0) ③11.0 | 体部外面ハケ目 他はナデ | A:微細な白色砂粒・1mm程の長石・ 角閃石を含む B:良好 C:内10YR7/3 にぶい黄橙色 外10YR7/3にぶい黄橙色・ 5YR7/6橙色 | |
| 60 | 石製品 | 石斧 | SD01 最下層 | 最大長14.7 最大幅7.7 最 大厚2.4 重量351.9g | | | 安山岩製 |
| 61 | 石製品 | 碁石 | SD01 上層 | 長径2.2 短径1.9 厚さ0.95 重量5.4g | | | |
| 62 | 青銅製品 | 小銅鐸舌 | SD01 上層 | 残存長5.8 上端部幅0.6 下端部幅1.0 上端部厚さ 0.4 下端部厚さ0.8 重量 9.9g | | | |
| 63 | 土師器 | 丸底杯 | SX04 一段下げ | ① (14.0) ② (4.6) | 底部外面へラ切り 体部内外面下位指頭痕あり 内面ナデ 口縁部内外面回転ナデ | A:微細～3mm程の白色砂粒・雲母を 含む B:良好 C:内10YR8/3浅黄橙 色・10YR5/6黄褐色 外10YR8/2灰白 色 | |
| 64 | 須恵器 | 短頸壺 | SX04 一段下げ | ① (12.6) ② (4.9) | 肩部外面カキ目 肩部内面当て具痕 他は回転ナデ | A:微細～1mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:N7/灰白色 | |
| 65 | 陶器 | 播鉢 | SD04 | ① (28.4) ② (8.65) | 体部外面下位回転へラ削り 口縁部内面～体部外面中位施 釉 内面播目あり | A:やや精良 B:良好 C:軸7.5Y5/2 灰褐色・7.5YR3/1黒褐色 胎土7.5Y7/4 にぶい橙色 | |
| 66 | 青磁 | 椀 | SD04 | ② (2.1) ④ (3.0) | 内面～底部外面施釉 見込みに金の施文 削り出し高台 | A:精良 B:良好 C:軸7.5Y5/3灰 オリーブ色 胎土7.5Y7/1灰白色 | |
| 67 | 土師器 | 小皿 | SD06 下層 | ① (9.3) ②1.25 ③7.0 | 底部外面へラ切り 底部内面調整不明 口縁部内外面回転ナデ | A:微細～5mm程の白色砂粒・雲母を 含む B:良好 C:10YR8/2灰白色 | |
| 68 | 土師器 | 丸底杯 | SD06 中層 | ① (15.0) ②3.3 | 内外面調整不明 | A:微細～2mm程の白色砂粒・長石を 含む B:やや不良 C:内10YR8/2灰 白色 外10YR8/3浅黄橙色・7.5YR5/6 明褐色 | |
| 69 | 土師器 | 丸底杯 | SD06 | ② (3.3) | 内外面回転ナデ | A:微細～2mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:10YR8/1灰白色 | |
| 70 | 土師器 | 椀 | SD06 中層 | ① (16.2) ②5.2 ④ (5.9) | 内外面調整不明 | A:微細～2mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:10YR8/2灰白色 | |
| 71 | 土師器 | 椀 | SD06 | ① (16.6) ②5.0 ④ (8.0) | 底部外面へラ切り後ナデ 外面下位回転へラ削り一部指 頭痕あり 内面調整不明 口縁部回転ナデ | A:微細な白色砂粒・長石を含む B: 良好 C:内10YR8/2灰白色・7.5YR6/6 橙色 外10YR8/2灰白色・7.5YR8/4浅 黄橙色 | |
| 72 | 土師器 | 椀 | SD06 下層 | ① (13.4) ②3.0 ③ (7.4) | 内外面回転ナデ | A:微細～2mm程の砂粒を含む B: 良好 C:内7.5YR8/4浅黄橙色 外 7.5YR8/3浅黄橙色 | |
| 73 | 土師器 | 器台 | SD06 下層 | ② (11.6) 下端径 (6.6) | 成形後ナデ 外面下位シボリ痕あり | A:微細～3mm程の白色砂粒・雲母を 含む B:良好 C:7.5YR8/2灰白色 ～7.5YR8/4浅黄橙色 | |
| 74 | 黒色土器 | 椀 | SD06 下層 | ② (2.65) ④ (6.8) | 内外面ナデ | A:微細～3mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR7/2にぶい黄橙色 外10YR5/1褐灰色 | 黒色土器 B類 |
| 75 | 瓦器 | 椀 | SD06 下層 | ② (1.7) ④ (6.0) | 底部外面へラ切り後ナデ 内面ナデ後ミガキカ 体部外面ナデ | A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:N7/灰白色 | |
| 76 | 白磁 | 椀 | SD06 上層 | ① (17.0) ②6.4 ④7.15 | 内面～体部外面施釉 外面回転へラ削り 削り出し高台 | A:精良 B:良好 C:軸7.5Y8/1灰 白色 胎土7.5Y8/1灰白色 | |
| 77 | 須恵器 | 杯 | SD06 上層 | ② (3.7) ③ (9.9) | 底部外面へラ切り一部回転へ ラ削り 他は回転ナデ | A:微細～2mm程の白色・黒色砂粒を 含む B:やや不良 C:10YR7/2にぶ い黄橙色 | |
| 78 | 土製品 | 棒状土製品 | SD06 | 残存長5.9 最大幅4.1 最大厚3.5 | 全面ナデ一部指頭痕あり | A:微細～7mm程の砂粒を多く含む B:良好 C:10YR8/2灰白色・5YR6/6 橙色 | |

第4表 遺物観察表④

| 番号 | 種類 | 器種 | 出土地点 | 法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※ (復元値) (残存値) | 形態・技法・文様の特徴 | A:胎土 B:焼成 C:色調 | 備考 |
|----|-----|-------------|---------|---|---|--|---------------------|
| 79 | 土製品 | 棒状土製品 | SD06 下層 | 残存長6.0 最大幅4.5 最大厚4.2 | 調整不明 | A:微細～6mm程の砂粒を多く含む B:良好 C:10YR8/2灰白色・7.5YR7/6 橙色 | |
| 80 | 土製品 | 棒状土製品 | SD06 中層 | 残存長14.9 最大幅4.9 最大厚3.1 | 全面ナデ一部指頭痕あり | A:微細～4mm程の砂粒・長石を多く 含む B:良好 C:2.5Y8/1灰白色～ 10YR7/3にぶい黄橙色 | |
| 81 | 石製品 | バレン状石 製品 | S P 15 | 最大長7.2 最大幅5.3 最大厚2.3 | 削りによる加工 | | 滑石製石 鍋補習具 煤付着 |
| 82 | 須恵器 | 杯 | カクラン | ② (1.4) ③ (11.8) | 底部外面へラ切り 体部外面下位回転へラ削り 他は回転ナデ 高台部外面墨付着か | A:1.5mm程の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N7/灰白色～N6/灰 色 外N6/灰色 | |
| 83 | 須恵器 | 長頸壺 | 遺構検出時 | ② (9.5) | 内外面回転ナデ 外面降灰 | A:微細～3mmの白色・黒色・茶褐色 砂粒を含む B:良好 C:N7/灰白 色～N4/灰色 | |
| 84 | 土製品 | 棒状土製品 | 遺構検出時 | 残存長7.2 最大幅4.8 最大厚4.0 | 全面ナデ | A:微細～5mm程の白色砂粒を多く含 む B:良好 C:7.5YR8/1灰白色・ 7.5YR6/1灰色 | |
| 85 | 土製品 | 環状土製品 | SD01 下層 | 残存長6.8 最大幅4.05 最大厚3.0 | 全面ナデ 側面指頭痕あり | A:微細～2mm程の白色砂粒・5mm 程の石英を少量含む B:良好 C: 7.5YR7/4にぶい橙色 | |
| 86 | 土製品 | 土馬 | 表土ハギ | 残存長4.3 径1.5 | 端部に蹄成形か | A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:10YR6/2灰黄褐色 | |
| 87 | 瓦 | 丸瓦 | 遺構検出時 | 残存長7.55 残存幅7.5 厚さ1.9 | 凹凸面ナデ | A:微細～2mmの白色砂粒・雲母を含 む B:良好 C:N7/灰白色～N5/ 灰色 | |
| 88 | 石製品 | 石鍋 | 表土ハギ | ① (22.0) ② (6.9) | 削りによる成形 内面ノミ痕あり | | 滑石製 外面煤付 着 |

Ⅳ. 上園遺跡出土小銅鐸舌の蛍光 X 線分析

九州歴史資料館 小林 啓

1. はじめに

本稿では上園遺跡（大野城市上大利4丁目）第16次発掘調査により出土した小銅鐸舌（弥生時代）を対象に行なった蛍光 X 線分析の結果について報告する。

2. 資料と方法

資料は上園遺跡の大溝 SD01から出土した小銅鐸舌（Ⅲ章第13図）である（図1）。蛍光 X 線分析では小銅鐸舌の元素組成の把握を目的とした定性分析を行なった。測定条件は以下のとおりである。なお、文化財資料の分析は非破壊を基本とするため、分析箇所は劣化の有無に係わらず遺物表面とした。

【測定条件】

分析装置：エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（AMETEK 社製 SPECTRO MIDEX）／対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／管電圧：50kV／管電流：1.0mA／測定雰囲気：大気／コリメーター：300 μ m／測定時間：300秒

3. 結果

蛍光 X 線分析の結果を図2に示す。分析は小銅鐸舌の表・裏面の5箇所で行ない、全ての箇所において銅（Cu）・錫（Sn）・鉛（Pb）が明瞭に検出された。これら3元素の他には、ヒ素（As）・銀（Ag）が比較的明瞭に検出された。この他、分析箇所により多少の違いはあるが、珪素（Si）・マンガン（Mg）・鉄（Fe）等が検出された。

遺物の特徴から想定された結果ではあるが、蛍光 X 線分析により銅・錫・鉛が明瞭に検出されたことから、小銅鐸舌は鑄造の青銅製品であることが分かる。ほぼ全ての分析箇所において、銅と同程度に錫が顕著に検出されているが、腐食により銅が消失して相対的に錫が優勢になったためであろう。この他、ヒ素や銀は銅に由来するもの、珪素・マンガン・鉄は土壌に由来するものと考えてよいだろう。

弥生時代の銅鐸において、時期や地域の推定に銅・錫・鉛の含有率が重要な要素とされているが、本稿では小銅鐸舌の表面（腐食層）を分析していること、測定雰囲気が大気であることから正確な定量値を提示することができない。また、本遺物は形状や出土状況から時期を特定することが困難であるため、今後、金属部分における定量分析や鉛同位体比分析等により時期や地域の推定が期待される。一方で、定量分析では金属部分を表出されるため遺物を削ることになり、鉛同位体比分析では少量ながらもサンプリングが伴い何れも破壊分析が前提となる。分析の際は遺物の状態を把握した上で慎重に判断する必要があるだろう。



図1 小銅鐸舌 (左：表面 右：裏面)

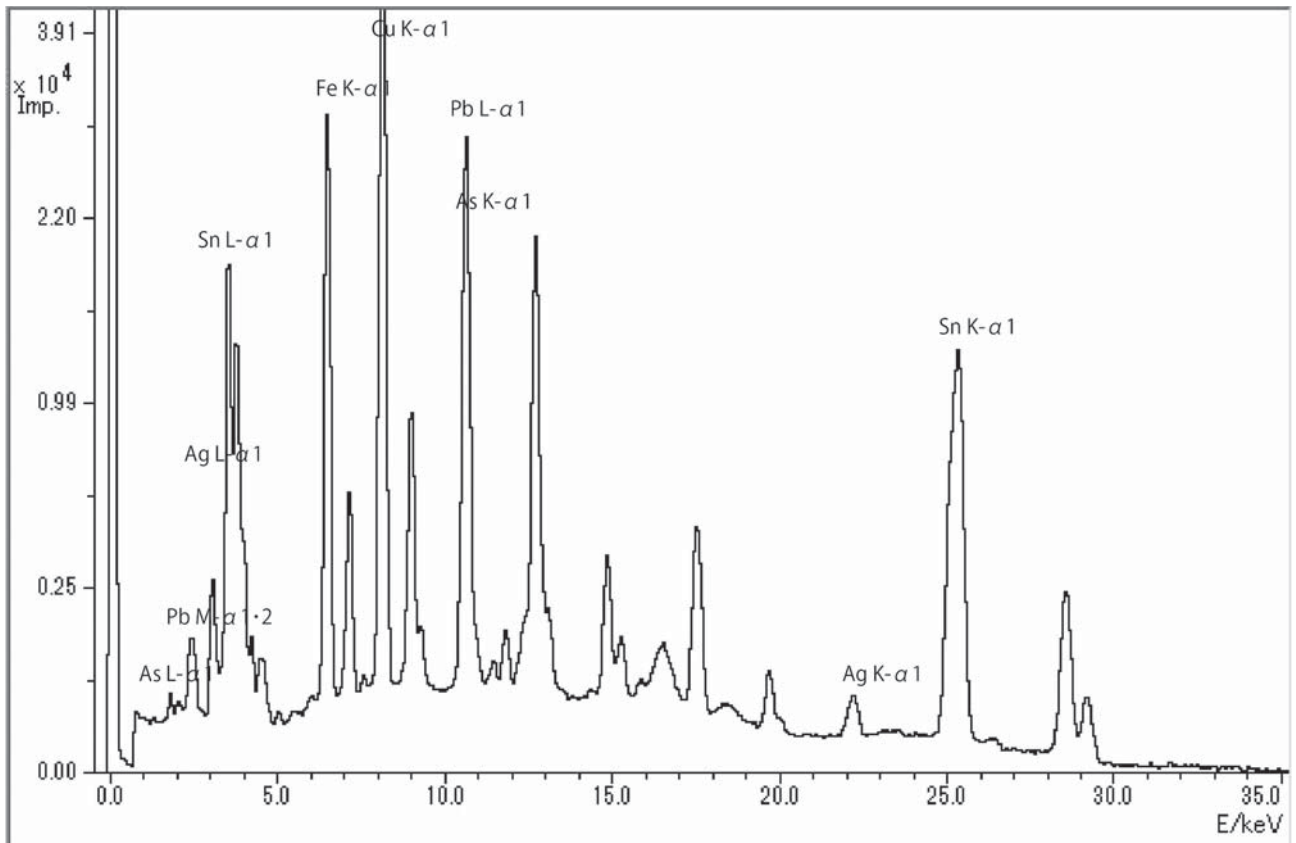


図2 小銅鐸舌の蛍光X線分析スペクトル

V. 総括

1. 遺跡の位置づけ

(1) 各時期の様相

弥生時代 当該期の遺構は確認できないが、後世の遺構から後期とみられる土器や小銅鐸の青銅製舌が出土した。調査地西側の丘陵部にあたる本堂2次調査地には、中期末から後期初頭の遺構が展開することから、本調査地出土遺物は周囲から流れ込んだものと想定できる。

古墳時代～奈良時代 当該期の遺構は確認できなかった。6世紀後半から8世紀にかけての土器は一定量出土したものの、いずれも包含層や後世の遺構に伴うものであった。対象地の南から東側には、6世紀後半を中心とした遺構が広がることから、対象地は集落の縁辺部である可能性が高い。

平安時代～鎌倉時代 今回確認した遺構の多くが当該期にあたる。溝跡（SD01・02・04・06）や調査区南東側に広がるピット群が該当する。SD01・02・06は11世紀後半から12世紀前半、SD04は12世紀後半に位置づけられる。ピット群から出土した遺物はいずれも小片で、詳細な時期は決めがたいが、概ね平安時代後期頃と考える。

(2) 溝跡の位置づけと集落景観

ここでは主要な遺構である2条の大溝 SD01・06に焦点をあて、11～12世紀における周辺の遺跡動態にも着目しながら、その機能的な位置づけを行う。各調査地点については、第16図に示した。

南北へのびる SD01は、隣接する4次調査地において、南側の延長部が確認されている。SD06との関係性が分かる部分は検出できておらず、接続するか否かは不明である。北側は、さらに延伸するとみられる。溝底面は南から北に向けて勾配がとられており、水路としての機能も果たしうる。

一方 SD06は、東西で延長部分が確認されている。西側は本堂2次の SD01が該当する。12世紀代の区画溝とされており、幅2.6～4 m、深さ0.3～1.1mを測り、断面は逆台形をなす。東端から23 mほど北西へのび、その後南西方向へ向きを変えており、北側へ張り出すような形である。戦前の地形図をみると、この溝を境に南側が一段高くなることから、SD01は本来、丘陵裾部を巡っていたとみられる。一方、東側の延長部は上園13次で確認された SD40が該当する。幅3 m、長さ65mを測り、東へさらに延伸するとみられる。溝内からは12世紀前半代を下限とする土器類が多量に出土している。このように、SD06の東西に展開する溝は、平面的な連続性はもちろん、規模や機能した時期も概ね一致する。また、溝底面も西から東へと勾配が取られており、水路としての機能も果たしうる。

以上のように、大溝 SD01・06は周辺の調査においても延伸部分が確認でき、いずれもかなりの規模である。以下では SD01に連なる南北溝を大溝 A、SD06に連なる東西溝を大溝 B と呼称し、機能について検討する。周辺の調査状況から、区画溝の可能性が高いと考えるため、はじめに集落の様相について整理しておく。

当該期の遺構が最も展開するのは、大溝 B より南側のエリアである。上園1・2次では、掘立柱建物や井戸が検出されている。さらに南側の上園7次では、方位を揃えた複数の掘立柱建物や木

製の井戸枠を備えた大型の井戸、そしてそれらを囲む方形の区画溝も確認されており、集落内における階層差も想定される。また、西側の丘陵斜面にも掘立柱建物や井戸が展開するほか、本堂7次で確認された谷部からは当該期の遺物が大量に出土している。遺物には呪符木簡や木製形代といった祭祀的なものが含まれ、周囲には草堂とされる遺構も存在することから、祭祀をつかさどる場であったとみられる。一方、大溝Bより北側のエリアでは、大溝Aの東西で遺構の粗密が認められる。西側は、後世の削平を考慮する必要もあるが、16次調査地の遺構分布は希薄であった。さらに北側の上園6次も遺構はかなり散漫で、当地より北側一帯の試掘調査では遺構が確認されていない。一方大溝Aの東側には比較的多くの遺構が展開し、上園14次では掘立柱建物や土坑、上園10次では畝状遺構（畝間溝）も確認されている。

以上を整理すると、大溝Aはこれを境に遺構の粗密が生じることから、居住域の辺縁を区画する溝、大溝Bは居住域を横断することから、居住域の内部をさらに区画する溝、と想定できる。後者の場合、居住域に機能や階層的な差異が想定されるものの、現状では明らかでない。

また、大溝Aは南から北へ、大溝Bは西から東へと勾配が取られており、水路の機能も想定される。大溝Aは微高地の傾斜に沿って掘削され、平田川に平行することから、効率的な配水が可能であり、灌漑用水路の可能性がある。一方大溝Bは平田川に直交するため、灌漑用水路としては不適であり、生活用水路などが想定できようか。ただし、いずれも水源については未確認である。

一方大溝Bについては、三兼池の洪水吐・仮排水路と想定する検討もある。三兼池とは、上園遺跡から丘陵を隔てた西側の谷部をせき止めて造られた人工の溜池である。朝岡俊也氏は、大溝Bの西端が丘陵斜面に対して直交し、そのままのびれば三兼池堤防の東端部にあたること、溝の周囲に同時期の集落が展開しないことを根拠に、三兼池の洪水吐あるいは仮排水路の可能性を指摘した（朝岡 2017）。前者は溜池内の水が越流し、堤が破壊されるのを防ぐための排水路、後者は堤の築造や改修時の盛土工事に伴う仮排水路である。これらの証明には、いくつかの課題が残る。まず、三兼池の築堤時期だが、江戸時代にはすでに存在した記録が残るものの、中世まで遡るのかは明らかでない。また、溜池と溝の接続部分も未確認である。しかしながら、溝の西端部が丘陵斜面に対して直交する理由を合理的に解釈する上では示唆に富む指摘であり、今後の検討課題である。

上記の検討を踏まえると、今回確認された2条の大溝は、何らかの区画を意図した溝である可能性が高い。これは、周辺に同時期の集落が展開することを最大の根拠とする。ただし、水路など複数の性格を備えていた可能性もあり、調査の進展に応じて検討を重ねる必要がある。

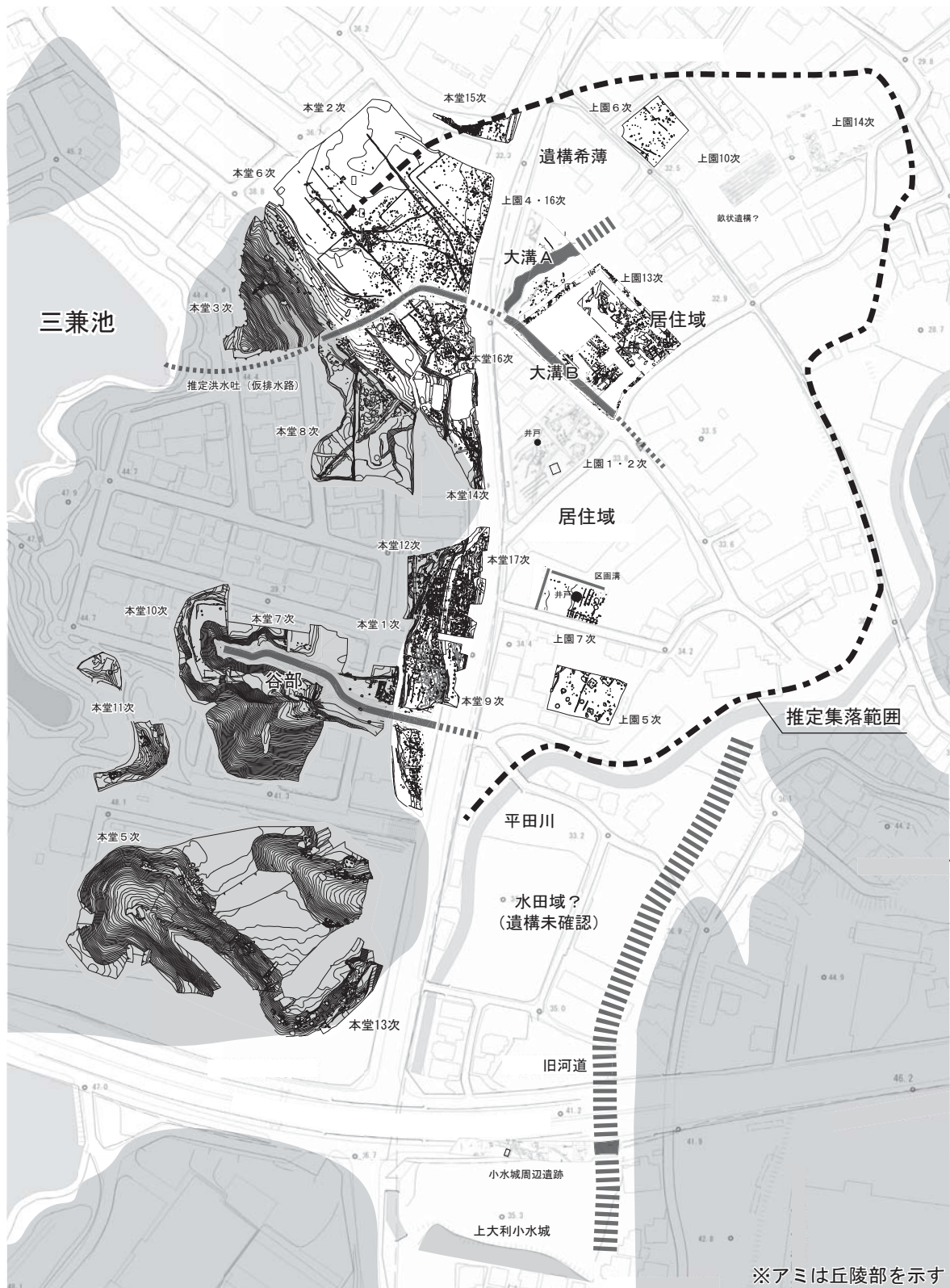
また、11世紀後半から12世紀前半代の遺構・遺物が卓越し、当該期に人的活動が拡大したことは間違いない。大溝A・Bも、その盛行を物語っている。さらに、上園遺跡周辺では土器焼成関連遺物が多量に出土しており、隣接する天神田遺跡では瓦器焼成遺構も確認されている。第3節でも述べるが、当該地は福岡平野のなかでも土器生産が盛んな地域であったとみられる。朝岡氏は、この地を土器生産拠点と位置付け、博多の整備と連動して盛行した集落と位置づけた（朝岡 2017）。しかし、12世紀後半には遺構・遺物の減少が認められ、集落は急速に衰退したようだ。これは集落の移転とも捉えられるが、その移転先や要因については明らかでなく、引き続き検討の必要がある。

（山元瞭平）

溝跡の位置付けについては、朝岡俊也氏に多くのご教示を頂きました。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 朝岡俊也 2017「大野城市域の中世村落—貿易都市博多の周辺1—」『七隈史学』第19号 七隈史学会
朝岡俊也 2020「日本考古学における水路研究の手法—弥生時代～中世—」『福岡大学考古学論集3—武
末純一先生退職記念—』武末純一先生退職記念事業会



第16図 上園遺跡周辺遺構分布図 (1/3,000)

2. 青銅製品の位置づけ

上園遺跡第16次調査では、大野城市内で初めての出土となる小銅鐸の舌が出土した。SD01の土層観察用ベルトを壊していた際に、第1層から出土した。法量は、残存長5.8cm、上端部幅0.6cm、中端部幅0.8cm、下端部幅1.0cm、上端部厚さ0.4cm、中端部厚さ0.5cm、下端部厚さ0.8cm、重量9.9gである。

今回出土したものは舌のみで、小銅鐸本体は出土していない。そのため本稿では、全国で出土した小銅鐸や小銅鐸舌を集成し、本遺跡で出土した舌がどの型式の小銅鐸に伴ったのかについて若干の検討を行った。小銅鐸の分類は、白井久美子氏の研究（白井 2015）に拠った。

分類

A 類：朝鮮式系小銅鐸

a 鈕幅が舞幅に等しいもの（A-a 類の分布は九州に限定される）

b 鈕幅が舞幅より狭いもの（円環状の鈕と円筒形の鐸身をもつ総高10cm 以上の大型品）

B 類：銅鐸型銅製品

C 類：汎用型

- ・半円形の鈕をもつ無緒・無文の小銅鐸で、鐸身上部に一對の型持孔をもつ
- ・鈕断面は菱形・円形・楕円形と多様

紙面の都合上、集成表は福岡県内での出土例や青銅製の舌が共伴した例にとどめるが、小銅鐸は栃木県を北限、熊本県を南限として全国で60例確認されている。しかし小銅鐸舌と共伴する例は極めて少なく、特に青銅製の舌と共伴した例は全国でも6例のみである。そのうち1例は未報告資料であり詳細は不明なため、以下では5例（第5表1、3、6、7、14）に注目していく。

現時点で確認されている舌と共伴した小銅鐸は、A-a 類4例とB類1例である。舌の形態は、すべて頭部に紐を通すための円環状の穿孔を持ち、円環状の穿孔直下でややくぼむものが多い。

ここで東奈良遺跡出土小銅鐸を見てみる。東奈良遺跡出土小銅鐸はB類に位置づけられ、総高は14.4cm、共伴した舌は8.3cmを測り、他の小銅鐸と比較すると大型品である。また重量が記載されている小銅鐸は少ないが、重量がわかっているものはすべて200g以内に収まる中で、東奈良遺跡出土小銅鐸の重量は750gとはるかに重い。法量や重量から、服部氏が指摘した通り、東奈良遺跡出土小銅鐸と舌は、小銅鐸と銅鐸の中間的なものであるといえよう（服部 2002）。

残る4例の小銅鐸は、総高5.3～7.6cmを測る。他の例を見てもA-a類の小銅鐸の総高は、5～7cmであり、10cmを超えるような大型品は確認されていない。また小銅鐸に伴う舌は5cm前後に集中し、小銅鐸本体とほぼ同規格でつくられているようである。

上園遺跡出土舌は円環状の穿孔をもつと推測され、現存長が5.8cm以上となるが、8cmを超えるような大型品になる可能性は低く、A-a類に伴う舌に近い印象を受ける。以上のような点から、上園遺跡出土舌に伴った小銅鐸の型式はA-a類に属する可能性が高いと考える。

上述した通り、小銅鐸の資料そのものが少なく、特に舌と共伴した小銅鐸は6例しか確認されていない。上園遺跡出土小銅鐸舌に伴う小銅鐸を検討するうえで、十分な資料数とは言い難い。今後、さらに資料数が増加したのちに、改めて検討を行いたい。（齋藤明日香）

参考文献

※報告書の出典に関しては紙面の都合上、市町（業者）名とシリーズ番号、発行年のみ記載した。

白井久美子 2015 「小銅鐸同工品の検討」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』千葉大学大学院人文社会科学研究所

常松幹雄 1985 「小銅鐸の分布とその背景——小銅鐸の史的的位置づけをめぐる——」『古代探叢Ⅱ——早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集Ⅰ』早稲田大学出版部

西山由美子 2007 「熊本県八代市上日置女夫木遺跡出土の小銅鐸」『九州考古学第82号』九州考古学会

服部信博 2002 「銅鐸に伴う「舌」について」『研究紀要第3号』愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

参考資料

中尾祐太 2020 「謎の飛鳥時代の瓦群—那珂遺跡群の調査成果より—」埋蔵文化財センター考古学講座—発掘調査速報編—

第5表 小銅鐸・舌集成表

小銅鐸

| No | 遺跡名 | 所在地 | 出土状況 | 分類 | 時期 | 総高 (cm) | 重量 (g) | 備考 | 出典 | 発行年 |
|----|--------------|----------------------|-----------------|------|-------------|------------|-----------|--------------------|---------|------|
| 1 | 東奈良遺跡 | 大阪府茨木市東奈良 | 溝 | B | 弥生・中期後半 | 14.4 | 750 | 舌共伴。 菱環鈕銅鐸を模す。 | 茨木市概報 | 2003 |
| 2 | 大南遺跡 | 福岡県春日市大谷 | 溝 | B | 弥生・後期前半 | 10.1 | - | 菱環鈕式銅鐸を模す。 | 春日市概報 | 1976 |
| 3 | 浦志遺跡 A 地点 | 福岡県糸島市 (旧前原町大字浦志) | 溝 | A-a | 弥生・後期～古墳・前期 | 6.6 | - | 舌共伴。 | 前原町15 | 1984 |
| 4 | 今宿五郎江遺跡2次 | 福岡県福岡市西区 | 溝（谷部包含層） | A-b | 弥生・後期前半 | 13.5 | - | | 福岡市238 | 1991 |
| 5 | 今宿五郎江遺跡11次 | 福岡県福岡市西区 | 谷1203上層部 | A-a? | - | - | - | 破片資料のため不明。 | 福岡市1221 | 2014 |
| 6 | 原田遺跡 | 福岡県嘉麻市馬身 | 15号墓 (棺外副葬品) | A-a | 弥生・中期前半 | 5.5 | - | 舌共伴、有文。 舌は基部のみ。 | 嘉徳町7 | 1987 |
| 7 | 板付遺跡54次 | 福岡県福岡市博多区 | ピット | A-a | 弥生・後期 | 7.6 | - | 舌共伴。 | 福岡市410 | 1995 |
| 8 | 井尻 B 遺跡17次 | 福岡県福岡市南区 | 住居跡 (SC4664) | A-a | 弥生・後期 | 5.3 | 12.9 | | 福岡市834 | 2005 |
| 9 | 元岡・桑原遺跡42次 | 福岡県福岡市西区 | 自然流路 | A-a | 弥生・後期後半 | 6.9 | 48.1 | | 福岡市1246 | 2014 |
| 10 | 元岡・桑原遺跡42次 | 福岡県福岡市西区 | 自然流路 | A-a | 弥生・後期後半 | 7.3 | 59.1 | | 福岡市1246 | 2014 |
| 11 | 比恵遺跡125次 | 福岡県福岡市博多区 | 井戸 | A-a | 弥生・後期～終末期 | 現5.3 | - | | 福岡市1237 | 2014 |
| 12 | 立明寺地区遺跡 B 地点 | 福岡県筑紫野市立明寺 | 方形周溝状遺構 | A-a | 弥生・後期後葉 | 現4.3 | - | | 柳島田組 | 2009 |
| 13 | 高三瀧遺跡4次 | 福岡県久留米市三瀧町 | - | - | - | 6.6 | - | | 未報告 | - |
| 14 | 上日置女夫木遺跡 | 熊本県八代市上日置町 | 包含層 | A-a | 弥生・中期～後期 | 5.3 | - | 舌共伴。 国内最南端の出土例。 | 西山氏論文 | 2007 |
| 15 | 那珂遺跡182次 | 福岡県福岡市博多区 | 土坑? | - | - | - | - | | 未報告 | - |

舌

| No | 遺跡名 | 所在地 | 出土状況 | 長さ (cm) | 最大幅 (cm) | 重量 (g) |
|----|-----------|------------|--------|------------|-------------|-----------|
| 1 | 東奈良遺跡 | 同番号に対応 | 同番号に対応 | 8.3 | 1.6 | 50 |
| 3 | 浦志遺跡 A 地点 | | | 5.4 | 0.85 | - |
| 6 | 原田遺跡 | | | <3.1> | 0.6 | - |
| 7 | 板付遺跡54次 | | | 5.5 | 0.9 | - |
| 14 | 上日置女夫木遺跡 | | | 5.5 | 0.7 | - |
| 15 | 那珂遺跡182次 | | | - | - | - |
| | 上園遺跡 | 福岡県大野城市上大利 | 溝 | 現5.8 | 1.0 | 9.9 |

A-a類



第17図 福岡県内出土小銅鐸の諸例 (1/3、9のみ1/4)

3. 棒状土製品の位置づけ

(1) はじめに

今回調査したSD01・06からは、棒状土製品とよばれる遺物が多数出土した。この遺物は、土器（特に瓦器）焼成遺構からも出土するため、土器焼成に関わるものと考えられている。形態は、中央から両端に向かって細くなるものが多く、断面は方形、円形、多角形と多様だが、方形のものが普遍的である。使用法には分焰柱や焼台など、複数の見解がある。近年、瓦器碗の高台が付着した個体（長安 2016）や高台痕跡を残すもの（石川 2021）などが確認されており、焼台として使用された可能性が高い。ただし、使用方法を示す明確な出土例はなく、良好な出土状況の発見が待たれる。使用方法についてはさらなる検証を要するが、棒状土製品と土器生産が強い関連性を有する点については大方の同意が得られている。

上園遺跡周辺における棒状土製品の集中的出土は以前より知られており、牛頸窯跡群における須恵器生産以降の土器生産を解明する上で重要な資料であると述べられてきた（舟山編2017等）。一方で、出土量の多さは感覚的な指摘に留まり、他地域との比較による多寡は示されていない。そこで、本稿では福岡平野における棒状土製品の集成と検討を行い、上園遺跡における棒状土製品の評価と位置づけを行う。

(2) 福岡平野の棒状土製品

集成対象地域は、福岡市・大野城市・春日市・太宰府市・那珂川市・筑紫野市とした。紙幅の都合上、集成表の掲載は見送り、出土地位置図と主要な遺跡の出土量比のみ示した（第18・19図）。

集成の結果、253点を確認した。第18図をみると、福岡平野の南部、つまり現在の太宰府市下大利・上大利・白木原一帯に集中している。主な出土地をみると、上園遺跡で27点、本堂遺跡で24点のほか、やや離れるが、御供田遺跡（九大筑紫キャンパス）で24点、水城跡周辺で24点である。福岡平野全体の出土量に対する比率を示すと、上園遺跡（本堂遺跡を含む）のみで20%、御供田遺跡など周辺の遺跡を含めると43%となり、数量的にも本地域に卓越することが分かる。

時期比定の困難な資料が多いものの、概ね11世紀後半から出現し、12世紀に増加する。13世紀には減少に転じることから、土器碗生産の衰退と連動する可能性がある。また、当該期の土器焼成遺構からは、棒状土製品が必ず出土しており、両者が強く関連するということが再度確認した。ただし、焼成遺構はわずか4例（福岡市田村21次SK16、同上月隈2次SX36、大野城市薬師の森33次SX24、同天神田1次焼成遺構）と非常に少ないことから、遺構自体が残りづらい形態のもの、あるいは認識しづらいものであったとみられる。

(3) 上園遺跡の棒状土製品

上園遺跡では、丘陵部・平野部問わず出土しているが、明確な土器焼成遺構は確認されていない。西側丘陵部では広く出土するが、本堂7次谷部からの出土が目立つ。近隣の天神田遺跡では丘陵部に土器焼成遺構が展開することから、丘陵部での生産は确实視される。一方平野部でも多く出土するが、区画溝とした大溝Bを境に多寡が認められる。溝の南側ではほとんど出土しないものの、北側では多数出土している。特に大溝A・Bからは焼き歪んだ瓦器類も多く出土しており、居住域で土器生産が行われた可能性もある。

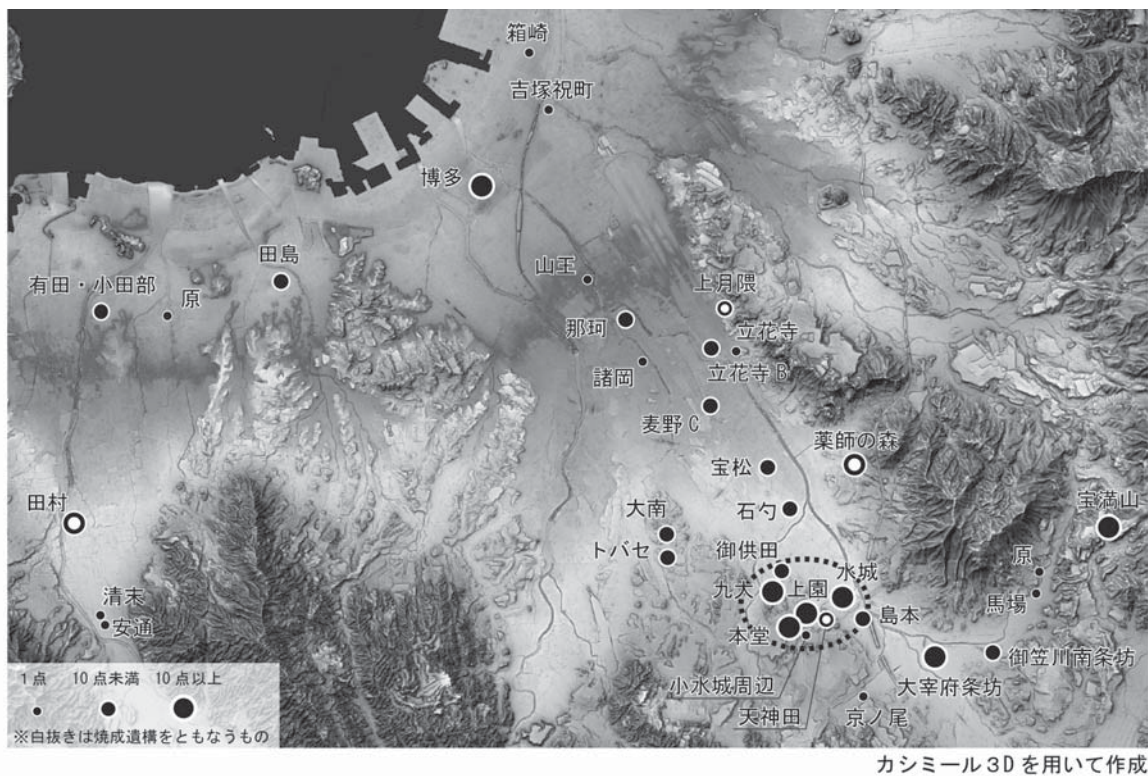
(4) おわりに

検討の結果、福岡平野の棒状土製品は上園遺跡の周辺地域に集中することが判明した。このことから、当地域は土器生産が盛んな場所であったとみて良いだろう。ただし、焼成遺構は極めて少なく、生産量の推定は困難である。今後は土器自体の分析を通して、当地域の型式学的特徴を抽出し、生産された土器がどこへ、どの程度流通したのかも明らかにすべきであろう。こうした分析を経て初めて、当地域における土器生産盛行の背景が鮮明になるものと言える。

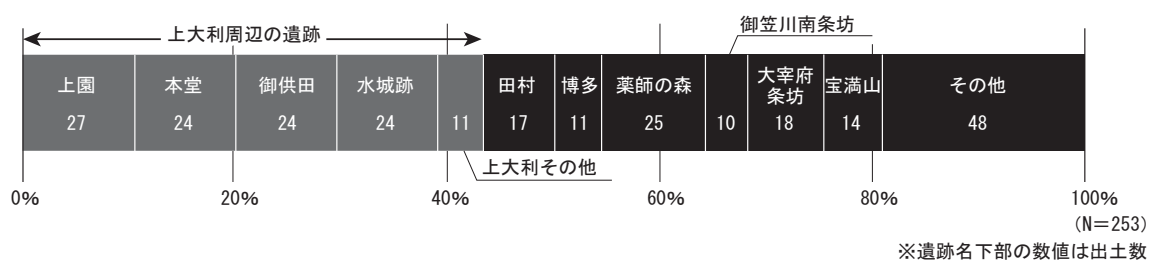
(山元瞭平)

参考文献

- 石川 健 2021「瓦器焼成遺構関連遺物について」『九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）総括報告書2』九州大学埋蔵文化財調査室
 長安 慧 2016「棒状土製品からみた中世の窯業」『七隈史学』第18号 七隈史学会
 舟山良一編 2017『上園遺跡6』大野城市文化財調査報告書第160集 大野城市教育委員会



第18図 福岡平野棒状土製品出土地 (1/150,000)



第19図 棒状土製品出土地別比率

圖 版



(1) I区全景 (南西から)

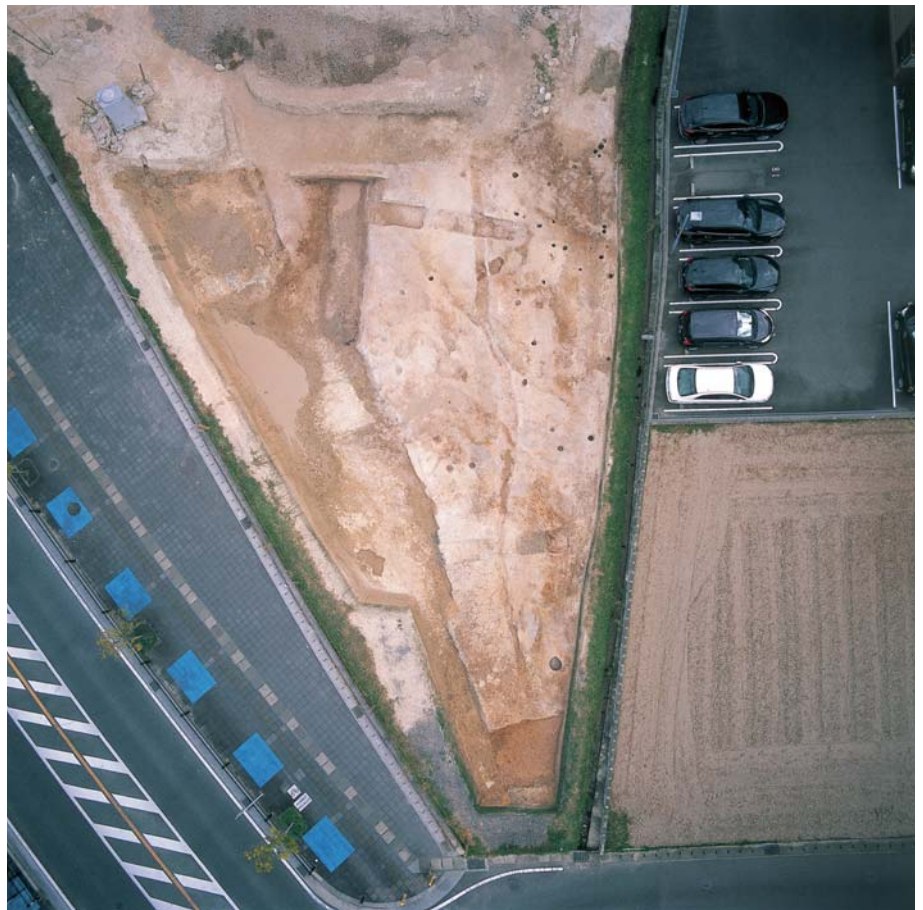


(2) II区全景 (北東から)

図版2



(1) I区俯瞰写真(上が北)



(2) II区俯瞰写真(上が北)



(1) 調査前全景
(南西から)



(2) I区 SD01完掘状況
(南から)



(3) II区 SD01完掘状況
(南西から)

図版4



(1) SD01土層 A-A'
(南西から)



(2) SD01土層 B-B'
(南西から)



(3) SD01土層 C-C'
(南西から)



(1) SD01遺物出土状況
(北から)



(2) SD01掘削状況
(北から)



(3) SD02完掘状況
(南西から)

図版6



(1) SD02土層
(東から)



(2) SD04完掘状況
(北東から)



(3) SD04土層 A-A'
(西から)



(1) SD04土層 B-B'
(南から)

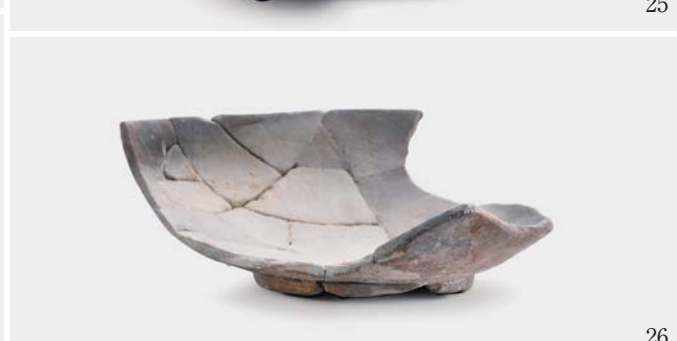


(2) SD06完掘状況
(北西から)



(3) SD06土層
(西から)

图版 8







棒状土製品集合

報告書抄録

| ふりがな | かみのそのいせき | | | | | | | |
|------------------|---|--------|------|----------------------------|--------------------|------------------------------|--------|-----------|
| 書名 | 上園遺跡9 | | | | | | | |
| 副書名 | 第16次調査 | | | | | | | |
| 巻次 | 9 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 大野城市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第193集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 齋藤明日香（編） 山元瞭平 | | | | | | | |
| 編集機関 | 大野城市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話092(501)2211 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2022年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 ° ' " | 東経 ° ' " | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| かみのそのいせき 上園遺跡 | ふくおかけんおおのじょうしかみおおり 福岡県大野城市上大利 ちょうめ 4丁目126番1 | 402192 | | 33° 28' 54" | 130° 27' 52" | 2020.6.10 ～ 2020.10.30 | 1,356㎡ | 保育園 建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 上園遺跡 第16次調査 | 集落 | 平安 | 溝 | 須恵器・土師器・ 瓦器・陶磁器・ 青銅器 | | | | |
| 要約 | <p>上園遺跡は、牛頸山から北側に派生する丘陵に挟まれた沖積地に立地する。今回の調査では大溝をはじめ、11世紀後半から12世紀にかけての遺構を確認した。2条の大溝（SD01・06）は、周辺に同時期の集落が展開することから、区画溝である可能性が高い。また、土器生産に伴う遺物である棒状土製品も多量に出土したことから、周辺で土器生産が行われていたものとみられる。</p> | | | | | | | |

大野城市文化財調査報告書 第193集

上園遺跡 9

令和4年3月31日

発行 大野城市教育委員会
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 九州コンピュータ印刷
〒815-0035 福岡市南区向野1丁目19番1号